

12	小	国 534
二葉		

教育部
資料室
文部省検定済教科書
新教育実践研究所編

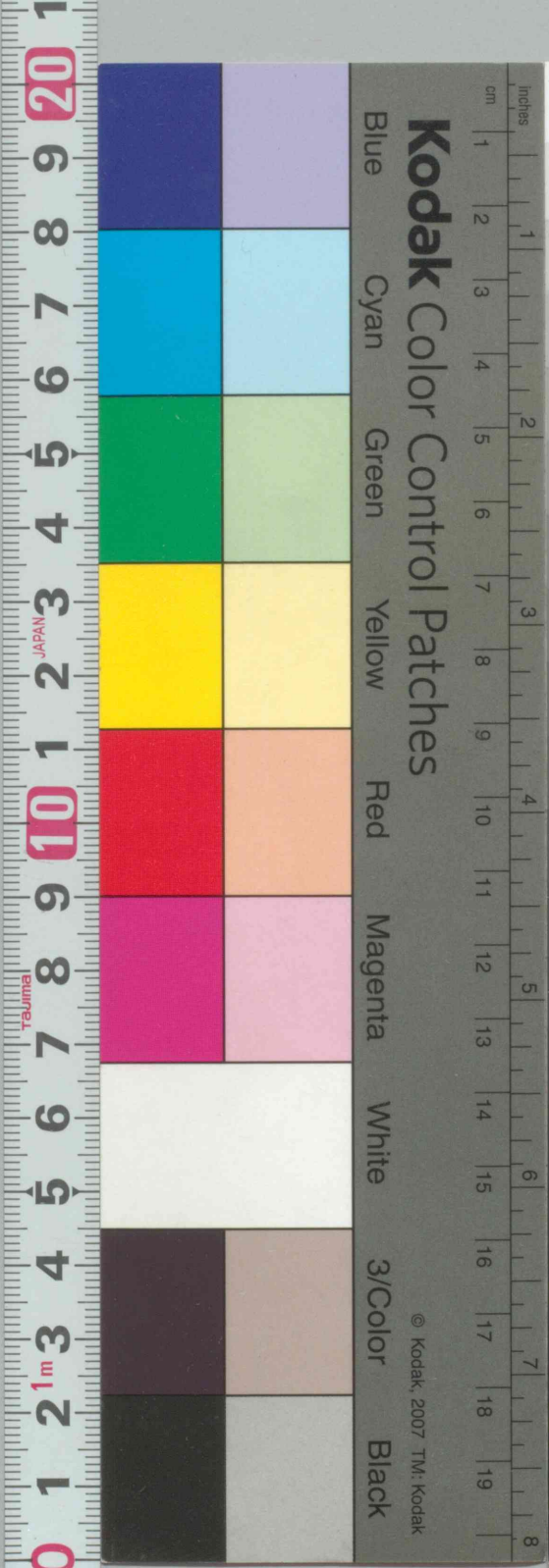
国語の本



五年 上

9

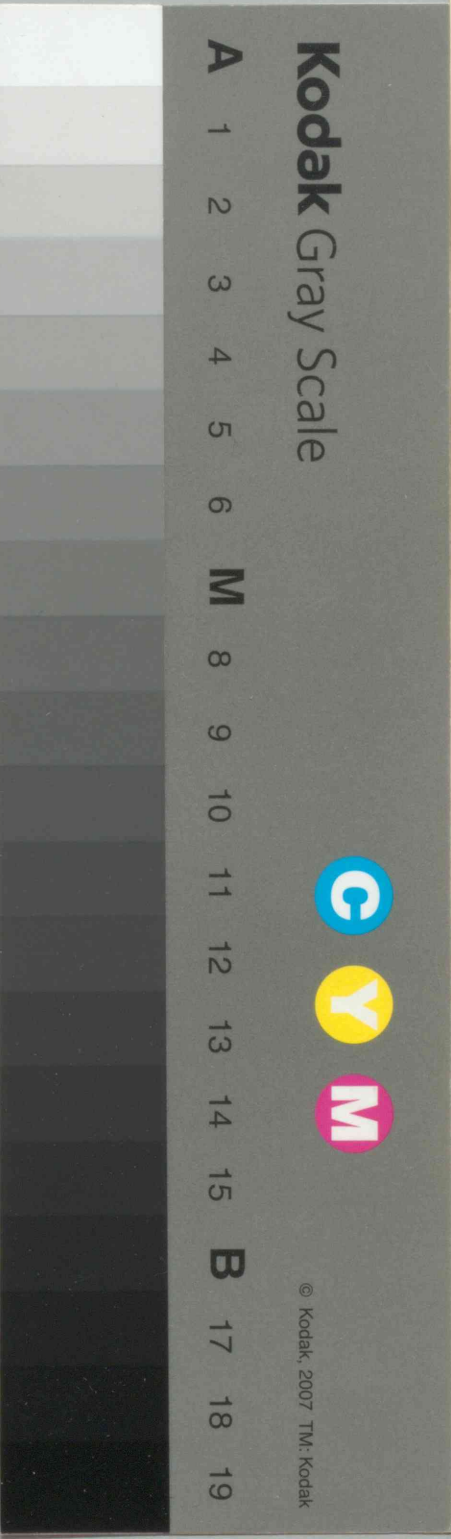
教科
34
013



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

60139

教科書文庫

6
810
34-1950
01304 49933



中央図書館

寄

昭和二十五年
文部省検定
日小学校国語科用

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449933

広島大学図書

0130449933



国語の本
九

第五学年
上



広島大学図書

0130449933





もくろく

一 出発

(一) かがやく太陽……………4

(二) どの花も……………6

(三) 五年生のはじめに……………8

二 働く人々

(一) 炭こう見学……………15

(二) かつお船……………23

三 文学のあじわい

(一) Mちゃんのうた……………36

(二) 祭のふえ……………45

四 すずめのとけい……………54

五 楽しい観察

(一) 夏の野道……………62

(二) 海の星の名……………71

六 観光日本

(一) 国立公園……………80

(二) 十和田湖行き……………89

七 人類愛

(一) ジェンナル……………103

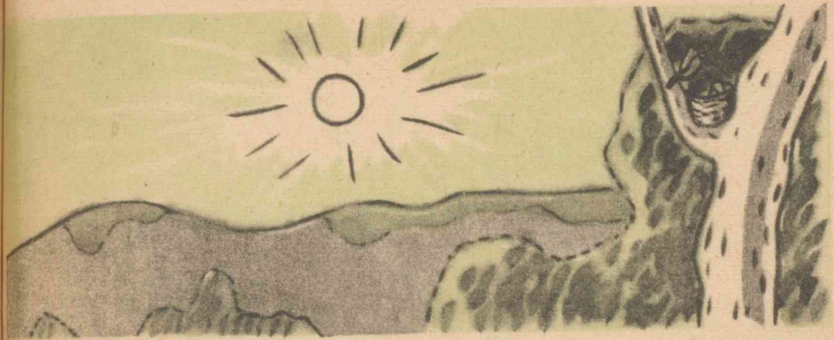
(二) ドラねえさん……………120

学習の手引……………145
 新しく出たおもなことば……………153
 新しく出た漢字……………159





のぼれ、のぼれ、おかから山へ、
知らない地平がつぎつぎひらける。
海だ、マストだ、地球はまるい。
おうい！　ほうい！
かあさん、見えるよ、ぼくらはおどる。



一　出　発
（一）　かがやく太陽
かがやく太陽、
明かるい花粉、
子供の世界はいつでも朝だ。
おうい！　ほうい！
鳥のすみつけた、ぼくらはさけぶ。
カだ、ピストン、

ベルト、ベルト、ベルトがまわる。
そこにも火花が子供を待っている。
おうい！　ほうい！
天気だ、クレーンがぐんぐんあがる。

(二) どの花も

タンポポはスマレになりたいなどは思わない。
スマレも、きいろくさきたいなどは考えない。
どの花もみんなその花らしく、
まじりけのないすがたで、精いっぱいにさいている。
だから、どの花もそれぞれに美しい。

花はどこへも飛んで行けない。
けれども、少しもさみしがらない。
小鳥やチョウが遊びにくる。
アリやミツバチも集まってくる。

だから、どの花もみんな明かるい顔をしている。

花はどこにでもさいている。
地球をとりまいて、
花はいつでもさいている。
ひとりびどりの心の中に一つの花をさかせて、
世界のすみずみまで、
色とりどりの花園をひろげよう。



きょう、ぼくたちの組で、四年生の時の文集展らん会があった。教室の後の長づくえに、新しくできあがったみんなの文集をならべ、その上のけい示板に、委員の村田君が、文集の題と名まえを書いた紙をはりだした。みんな思い思いの絵や文字を書いた表紙をつけて、りっぱに製本ができていた。あついののは五センチほどもあった。校長先生や外の先生方もおいでになって、にこにこしながら見ていらっしやった。

午後、みんなで文集のはしがきを読みあった。つぎに、田口君のとつしまさんと秋山さんのとをしようかいしてみよう。

○



月日のたつのは、ほんとうに早い。一年に入学した時の一年まつ組が、今では五年さくら組になった。もう上級生である。なんだかへんな気がする。しかし、ぼくは考える。このクラスはほかのクラスとくらべて、けっしてはずかしいところがない。五年さくら組のねうちが十分にあると。

男子二十二名、女子二十名のは、みんな力をあわせている。悪口のいいあいもなく、おたがいに悪をいましめ、善をすすめあっている。ちよつと何かのつごうで、ひとりがかこまるよ

うなことがあると、みんなが、「それっ」といって手助けをするありさまだからばんじゆ快だ。ことに、うめもと君、石田君のよ
うな組中の人気者がいて、いつもひょうきんなことをいって、
みんなをわらわせる。しかし、いざ学習、いざ仕事となると、
ふしぎなほど一心になる。これは、なんととっても、この組の
美点であると思う。

そのほか、かべ新聞の編集、研究の発表、見学や運動の計画、
学校図書館の活用、学級文集や詩集の発行、学級園のさいばい
など、計画も実行も反省も、いつもきびきびと進んでいく。編
集も司会もだいぶうまくなってきた。これというのも、先生を
中心にして、みんなの心がよくあっているからであろう。まず
まず自重して、よい上級生になろう。

○

ひら ひら ひら、

さくらの花びらが散ってきました。

朝日をうけて、

みんなきらきらと光っています。

おや、何か書いてあるようです。

読んでみましょう。

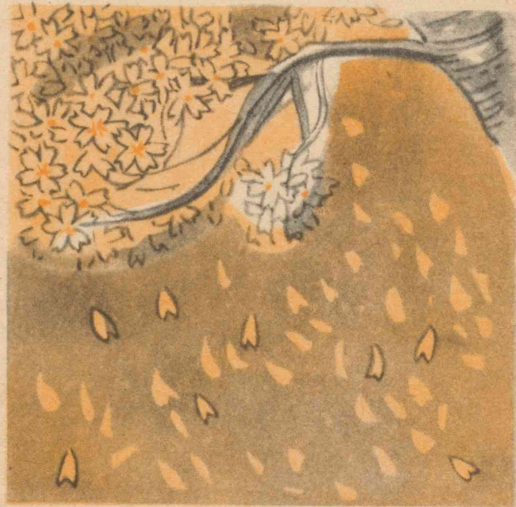
あ、向こうの方にも散りました。

やねの上にも、ひいらぎのえだにも、畑の中にも散りました。

みんな拾って、糸につなぎましょう。

○

教室のまどにも、いろいろなものがうつる。





春はつばめが、清らかにすんだ青空をすうい、すういと飛んで行くのが見える。さらに、西のかき根にある大きなさくらが、いっぱい花をつける時などは、ほんとうに美しい。じっと見つめてみると、花のおいが、ほんのりとおってくるように思われる。また、まつの木はまつの木で、静かなえだを、上下にゆっくりとゆすぶっている。

秋はさくらが、まっかにもみじして、はらはらと散るのがガラスごしに見える。それにまじって、どこからまっかってくるのか、かわった色と形のもみじが、落ちて来るのもきれいだ。

冬は風の向きにつれて、雪が、花のようにひらひらと散って

来る。青いまつの葉の上に、まっ白に積った雪は、いかにもすがすがしい。また、その積った雪が、二三日の後には、かげも残さず消えているのもおもしろい。まどのすぐそばに、そつとえだをさし出しているバラのえだの細いはりに、雪が積る形もおもしろい。

一年生の時のまどからは、はれやかな運動場がながめられた。にぎやかな話し声、うれしそうにはずむ足音、遊びのさけび声——運動場を思い出すと、いつもそよそよと南の風がふいていたような気持がする。

二年生の時のまどからは、向こうのろう下を通る人かげを見ただけだった。

三年生の時のまどからは、まつの木が正面に見えていた。今

の教室と感じがにっていた。

四年生の時のまどからは、学校の外のえんとつのけむりや、まっさおな空にのぼる太陽が、手にとるように見えた。丸山のてっぺんも見えていた。

五年生になって、いよいよ二階の教室へきた。一年の時の教室の真上である。二階だから、ずいぶん見はらしがいい。広いたんぼが見える。丸山も見える。遠くの山々も見える。

ガラスまどから見えるけしきは、種々様々で、みんなそれぞれ美しい。

しかし、そのけしきよりも、そこにうつる学校や広い社会の動きは、さらに種々様々なものである。気をつけて、よく見つめたいと思う。

二 働く人々

(一) 炭こう見学



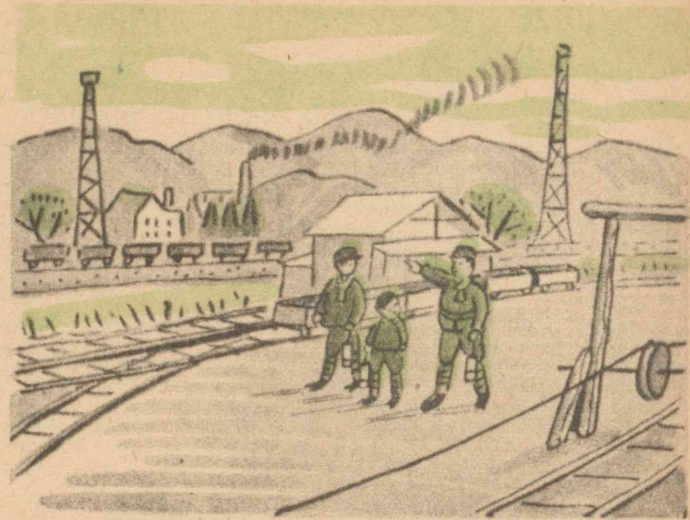
兄といっしょに、前々からこいといわれていた九州の知人の所へ出かけた。そこは、いまりわんにあるかなり大きな島である。いまりから小さな定期船に約一時間半ほど乗って行くど、その島につく。島にはぼくが見学した炭こうの外に、いずれも小きぼな炭こうが二つある。炭こうの近くには人家がまどまっでいて、ごくわずかの人の外は、みな炭こうにつとめている。だからこの島は、まったくの炭こう島というわけである。

ぼくたちが島についてから二三日の間は、雨がふり続いて何

もできなかつたが、ついでから四日目に、やっと炭こう見学といふことになった。兄とぼくはその家の人が出してくれたただぶだぶの上着とズボン、それに地下たびとゲートルといういでたちで、そこを出発した。

炭こうの事務所に行つて、カンテラを二つかしてもらつた。案内してくれる人が、炭こうへ行くときちゆう、いろいろと説明してくれる。線路がたくさんあつて、そのまん中を太いはり金が動いていた。車を運んでいるのである。

「向こうの方に大きな車があつて、はり金をのばしたり、ちぢめたりしています。それで車を動かすのです。こういうやり方の炭こうは外にはあまりありませんが。」と、その人が説明してくれた。



山の中ふくに木で作つたとうが立つていた。

「あれはこう内に空気を送るものです。これからはいる炭こうとは別のあなですが。」

「はあ、はあ。」

どいちいち感心しているうちに、この入口についた。線路はこう内へずっと続いている。あなの大きさは、高さ三メートルぐらいで、だいたいい汽車のトンネルと同じ形をしている。太い木を組んで上の土をささえていた。

道を歩いていた時はかなり暑かったが、中へはいるとひやりとする。しかし連日の雨で、足もとがぐちゃぐちゃになってい
る。その上二十度ぐらいのこうばいなので、つるつるすべって
あぶなくてしかたがない。木の階だんがついているが、どろど
ろになっているから、どれが階だんかわからないくらいであ
る。十メートルばかりはいった所に、上から水がぼちゃぼちゃ
たれてゐる場所がある。

「ここは三回ばかりくずれた所です。」
と、あっさり案内の人がいう。ぼく
はそれを聞いて不安になった。ぼく
たちが中にゐる間にくずれたらどう
なるだろうかど心配したが、いまさ



ら帰るわけにもいかない。どんどんくだっ
ていくうちに階だんもなくなっ
てしまった。坂がゆるくなったので、少し楽になっ
た。けれども、まん中には線路があり、両側には石がごろごろ
しているので、ひどく足もどがあぶない。

そのうちにこうが二つに分かれてゐる所へきた。右の方のこ
うへはゐることになった。このへんからすぐ横に石炭そうが見
えはじめた。あたりはまっ暗で、カンテラの光だけがたよりで
ある。このこうにはいつてから十メートルばかり行った所で、
また右へ曲る。このこうは短かくて、すぐ行きどまりだが、そ
の右側に一メートルぐらいのあなを何本もほってある。しゃが
んだ人が五メートルぐらいの間かくて、つるはしをふっている。
「よくこういうところで働いているものだ。」と心から感心した。

おくは暗くて見えないがだいぶ深
そうだ。このあなには細い線路が
ついていて、ほった黒光りのする
石炭をつぎつぎに車にのせて、順
順に横の人の所までおしてやる。
こうしてぼくたちのいる入口まで
来ると、ひとりの人が待っていて、
それを大きなトロッコにのせる。



一ぱいになると、さっきの本こうまでおしていく。そこからは
り金が引っぱっていくしかけになっている。

「この炭こうはひじょうに原始的なのです。」

と案内の人がいう。ぼくたちもさっきの本こうまでひき返して、
そのここの行きづまりまで行く。そこへつくまでに、やはり横
へはいるこうがたくさんあったが、どれにもはいらないで通り
過ぎた。そこからまたもどってきて、今度は左の方の小さなあ
なをはって進むと、すぐ大きなこうへ出た。これがさっき二つ
に分かれていた左の方のこうである。おくの方まで行って見る
と、そこに人が五六人集まっていてなにか話していたが、ぼく

たちを見ると、

「すぐはっぱをかけるから早く行かないとあ
ぶないぞ。」

という。きもをひやしてすぐひき返した。

「この上はもう海です。」

と案内の人がいう。なんだかうそのようだ。



あいかわらず道はぐちゃぐちゃで、ひどく歩きにくい。しばらくするとうしろの方で、

「ボツ」。

というおそろしい音がしたかと思うと、ぼくたちのカンテラが全部消えてしまって、あたりはまっ暗になった。今のがはっばだなど思ったが、まっ暗なので少しこわい。カンテラが全部消えてしまったては歩けない。これからどうするのかと不安になっていると、運よくひとりがライターを持っていて、みんなのカンテラに火をつけてくれたのでほっと安心した。それからまた、なんぎな道を苦心してのぼり、やっと出口まできた時は、安心したのかつかれたのか、からだ中の力がぬけて、ぼんやりしてしまった。

(二) かつお船

1 かつおは黒しおにのって

かつおは、あたたかい水でないと住まないのて、だん流の黒しおが流れているような海でないとれません。日本で、かつお漁は、かごしま、こうち、みえ、しずおか、ちば、みやぎの六県がいちばんさかんです。

かつおは、だん流であれば一年中とれるかというて、そうてはありません。春になって、南の方から黒しおのあたたかい流れが勢いよくはり出してくると、その流れにのって、北へ北へと泳いできます。毎年、春のはじめに、かごしま県のおき合にあらわれて、四国おきからしおのみさきに出て、夏になると、

いず七島、ぼうそうおき、金か山おきと、黒しおの流れにそつて秋には北海道のえりもみさきに泳ぎつき、これを最後に、かつお漁が終るのです。

そこで、春は南、夏から秋は北の漁場というふうに、時季によつて、よくかつおのつれる所へ出かけるわけで、

目に青葉 山ほととぎす 初がつお

というのは、かつおがとれはじめると、木は青葉をつけるし、ほととぎすの鳴きはじめる初夏だということを書いていいあらわしたものです。むかしは四国おきがさかんだつたので、かつおのこれはじめは、初夏だつたことが、この歌からもわかります。

かつおつりには、小さいわしの生きたものをえさにしてつけるので、かつお船には、小さいわしをかつておくいけすがどり

つけてあります。船の底から海水がはいるような仕組みになつており、いけすのいわしを使いきると中の海水をみな出してしまつて、こんどはこの中に、つり上げたかつおをおさめるはこに早がわりするように、うまく考えてあります。

かつお船は、ジーゼル・エンジンで動き、無線電信や、いろいろ航海に必要な機械を備えつけ、四十人から大きい船では七十人も漁夫が乗り組んで、たいへんにぎやかです。めいめい、自分のからだや力にあわせてつりざおの長さをきめ、つりばりはふつうのとちがつて、かぎがついていません。つりあげたかつおを、すぐはずせるようにするため、かぎがあると、魚をはずしにくく、それに、つれはじめると、ちよつどの手間もおしいくらいどしどしつれるので、かぎのついたはりではおつ

かないのです。

2 おきへおきへ

かつお船は、いま出港の準備に追われています。米やみそなど、航海に必要な二週間分ぐらいの食りようを、ヨイシヨ、ヨイシヨと船に積みこんでいます。それにまじって、氷を積みこむ人、氷はとれた魚がくさらぬようにひやすためです。重油を運びこんでいる人は、手も顔も油にまみれて、重そうにかついでいます。重油は、ジーゼル・エンジンを動かす大切な燃料です。たくさんな荷物を積みこんで、きつ水の赤いペンキがかくれています。

まだ、もう一つ、だいじなものが残っています。えきにする

小いわしの積みこみです。

いわしは、海岸近くの入り海でとれますが、そのまま、船のいけすに入れておきに出ると、死んでしまうのが多くなるので、入り海のいけすで、一週間ばかりかいらしておいてかつお船が、いよいよ港を出るといりまぎわに、さっきいった船の中のいけすへ入れるのです。

「おとうさん、にいさん。元気で行ってらっしゃい。」

子供たちの、手をふって見送るすがたが、だんだん、小さくなって、船はエンジンの音を小さきぎみにたてながら、おきへお



きへと走りつづけます。

無線室へ電話がはいるごとに、無線通信士は船長をたずねて、何か相談しています。かつおのとれるところ（漁場といます）は、毎年かわります。どこと行ってきまっていけないので、漁船は、よい漁場を見つけると、毎日朝とか夕方とかきまった時間に、陸上の無線局に通信します。それを、またあちこちの船の無線通信士がレシーバー（受話器）を耳にあてて聞きとります。四国おきの東けい何度、北い何度というふうに、漁場を知らせてくるのです。

船長は、自分の船の今いる所から、どの漁場がいちばん近いかをコンパスを出して測ります。もつと南に行け、少し西だ、と絶えず船の走る方向や速度をきめていくのです。

また、かつおは、あたたかい水の所がすきなのです。その温度は十八度から二十三度の間がもつともよく、またしおがおびのように流れて、一方は十八度、かた方は二十一度というように温度がちがっている境目のところに、いちばんよくいます。ですから、船が走っている間、いつも水をくみあげては、温度をはかって、絶えず気を配っているのです。

一方、マストの上やブリッジの上に、漁夫が交代で見はりに立って、かつおの群を見つけるのにいっしょうけんめいです。

3 とりやまが見つかった

もう、そろそろかつおの大群に出くわしてもよいころです。なにしろ、三日三ばんかけずりまわって、まだ、これはと思う

漁場が見つけ出せないのので、みんな、うずうずしているところです。

「やあ、とりやまが見つかったぞ——」。

マストの上から、うれしそうな声が、聞こえてきました。

鳥山というのは、鳥が山のように、海の上に重なって飛びまわっているのを、こういう名まえてよぶのです。

かつおの群は、海面近くにうかんで、泳ぎまわっているのですが、これをねらって海鳥が集まってくるのです。この鳥がとびまわるかっこうや、飛んで行く方向によって、かつおの群が、どのくらいの大きさか、また泳いでいく速さがどれくらいかが、おおよそわかるのです。

「とりやまは大きいぞ——」。

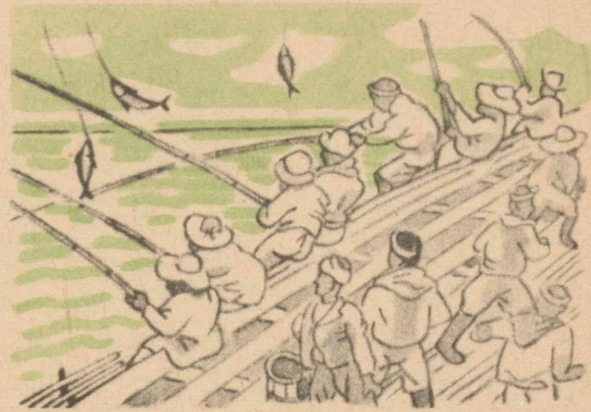
船の中は、一ぺんに、ワアツとわき立って、船は全速力でかつおの群に向かってつっこみます。さつとへさきをかわして、その群にのらんで走り、たちまちそれを追いつきました。

「そうれ、うまいわしだぞ」。

船のいけすから出したいわしを、海の中に投げいれます。パツとどび上ってかつおが食いつきます。一びきのいわしを、三びきも五びきもの大きいかつおが競争で取りあっています。

4 かんぱんは火事場のよう

エンジンの音が消えて、船はとまりました。船のまわりは、ヒチヒチ、パチャパチャ、右も左も前も後も、かつおでいっぱい。まるで、なべの中でお湯がわくように、海面が波だって、



かつおがとび上り、横つとびにおどりまわっています。

てんでにつりぎおを持った漁夫たちが、トモにならないで、ゆみのようにさおをたわめながら、エイ、エイとつり上げていきます。だれひとり、息をするひまもないうらいです。さおを上げる、かつおが上る。いやもう、つるといいうよりも、海から拾い上げているといった方がよいくらい。ホラコイ、ソラコイと、次ぎから次ぎに上ってくる。

かんぱんの上は、みるみるかつおの山です。バタバタと元氣よく、はねたり、おどったりして、しぶきがあがっています。

ただのひとりも、ぼんやりしている人はありません。まるで火事場のようなさわぎです。ひとのことなどかまったり、よそ見したりするどころではありません。

さおを投げる、かつおがはねる、糸がきれる。そら予備のさおだ。かつおがあがる、はねる、落ちる、とび上る。かんぱんの上は、足のふみ場もないほど、かつおでいっぱいだ。

どうやらかつおのつれぐあいも下火になったようだ。さあ、こんどはとり上げたかつおを、氷をつめた船倉の中におさめるのです。ていねいに、海水でかつおをあらう、氷といっしょにおさめるのです。

運がよいと、二時間ぐらいいわしのえさをみんな使い果すほどたくさんとれて、船倉がいっぱいになることもあります。

ところが、二日も三日も、ときには一週間以上も根気よく漁を
続けて、やっと船倉にいっぱいになることも多いのです。

「さあ、これでおしまいだ、船をまわせ。」

大漁のかつおを積んでいよいよ母港めざして帰ろうとする時
ほど、うれしいことはありません。日本一の漁夫は自分たちだ
という気持がします。

5 母港へ帰る

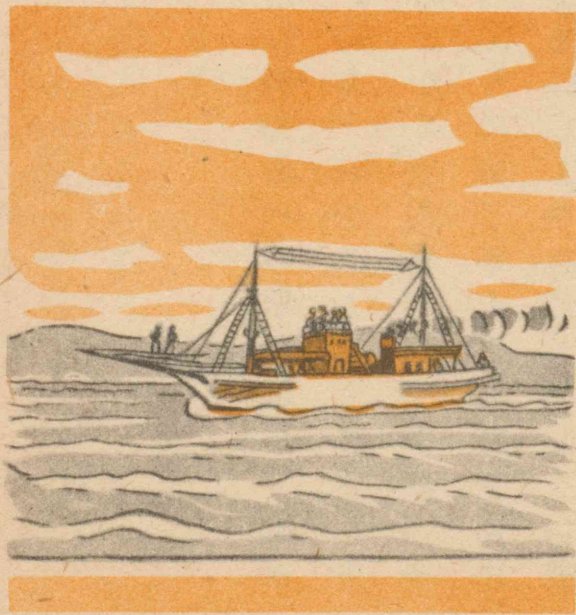
かんぱんのあちこちで、めいめいながら話が始まります。少
年たちは、年とったおじさんたちからいろいろおもしろい話を
聞いたり、つり方や、鳥山の見つけ方を教わります。とりたて
のかつおをおさしみにして食べるごはんのうまさ、すみきった

空の青さ、きらきら光る太陽、船乗りはやっぱりいいなあと、
自分で自分がうらやましくなるのも、この時です。

ポーとかん高い汽てきを鳴らして、母港の防波ていを過ぎま
した。

大漁旗がヒラヒラと風にな
びいています。

母港に帰りつく時間は、昨
夜の無電で知らせてあるので、
家のものが、ニコニコしなが
ら、船が岸へきに横づけされ
るのを、今か今かと待ってい
るのです。



三 文学のあじわい

(一) Mちゃんのうた

この間、中国から引きあげてきた知りあいの家のMちゃんから手紙をもらいました。おとうさんも、おかあさんも妹さんもみなそろって無事に日本に帰ることができた喜びが、手紙いっぱいにあふれていました。ひさしぶりにおじさんやおばさんに会えた時は、むねがつまって、なけてしまったとも、ようち園のころの友だちと、むかしのように毎日学校でなかよく勉強ができて、ほんとうに幸福ですとも、書いてありました。

私もすっかりうれしくなつて、ああMちゃんはほんとによか

ったなあど、その手紙をなお読んでいきますと、日本の秋の山や野や川が中国よりも美しくて、いろいろな秋の草花が次ぎから次ぎへと庭にさくので、朝目がさめるのが楽しいといつて、「おじさん、わたしは中国にいたころから、時々うたを作っています。はじめのうち、なかなか思うようにできなくて、こまりましたが、このごろは少しなれて、いくらか楽に作れるようになりました。」

これは二三日前に作ったうたです。おとうさんが、おじさんに見ていただくとよいとおっしゃいます。

「どうかおじさん、まずいところをなおしてください。」と、次ぎのよううたを書きそえてあつたのです。

コスモスの花がさいている花園に大りんのバラ女王
のごとく

コスモスが「くうにゃん」のようにさいている毎日通
るこの道ばたに

秋風がふくたびごとにうちの家のトタジの屋根の音
がきこえる

日がしずむ赤くそまった金峰^{かなみね}の山のいただきさびし
い夕ぐれ

私は、おどろいてしまいました。まだ小学校の五年にしか
ならないMちゃんに、こんなたくみな、清くやさしいうたが作れ
ようなどは、考えてみたこともなかったのです。まずはすっかり
うれしくなってしまったのです。まずい所をなおしてほしいと
書いてありましたが、なおさねばならないようなところは、ど
こにもありません。どれもみな、おもしろくうたえています。
どれも、よいうたです。

感じたことを、すなおに、ありのままに、ていねいにうたっ
ています。「うそ」がありません。だから、Mちゃんのやさしい心
やさびしい気持などが、だれにもわかるように、現われています。
その上、文章とはちがって、どのうたも、感じた時の心持そ
のままの調子をもっていきます。



大きなバラの花がひとつ、ぱつとさいいて、初秋のすみきった太陽の光にかがやいているのです。コスモスの小さな花の群にとりかこまれて、あざやかにさいいている大りんのバラの花——Mちゃんは、思わず、

どれもよいうたです。おとなの私などには作ることができない、子供らしい、じゅんな感じがでています。

いちばんはじめのバラのうたは、たぶん学校の花だんを見ながら作ったものでしょう。その花だんには、コスモスの群が、かわいらしい小さな花を、たくさんさかせています。ところが、その花の中に、美しい

「あ、このバラの花、女王様のようなわ。」とつぶやいたにちがいありません。コスモスの花を「おとも」のように従えているバラの女王——Mちゃんは、とっさに、そう感じたのです。

このうたは、その、はっと強く感じたことを、調子のある言葉と、調子のある形で、そのままうたっています。だから、文章とはちがった、生々した調子が出ています。

二番めのコスモスのうた——これはもっといいうたです。Mちゃんは、道ばたにさいいているやさしい感じのするコスモスの花を見ると、中国にいたころ親しくしていた「くうにゃん」のやさしいすがたを思い出すのです。コスモスの花はだれが見てもやさしく美しい花ですが、では、どんなに美しいか、やさ

しいか、言ってごらんとたずねられると、なかなかうまく言い
あらわせません。何か、それにた物にたとえてもしなければ
その感じはでてこない。Mちゃんは「くうにゃん」にたとえたの
です。実に、うまいたとえではありませんか。中国にいた者で
なければ作れないうたです。

第三のうたは、さびしいけれど、私はいちばん好きです。M
ちゃんのおうちのうらに、トタンぶきの小さなバラックがたっ
ている。——そのトタン屋根が、秋風にふきあおられて、時々
バタンバタンと音をたてるのです。春のころだと、あたたかく
て、心もうきうきしているから、あまり気にもならないけれど、
さみしい秋の夕ぐれに、その音を聞いてみると、寒々とした感
じになるのです。戦さいをうけた焼けあとで聞くと、ああ日本

が復興するのはいつのことであろうかと、おとなの私などでも
さびしくなってしまう。

このうたは、さびしいということばを使っていないのに、M
ちゃんのさびしい心がよくあらわれていますが、なぜでしょう。

それは、「秋風に」とうたってあるからです。さっきお話したよ
うに、「春風に」では、感じはまったくちがってきます。

「さみしい」と言って、気持をことばで説明してしまうと、ただそ
れだけの、ふかみのないうたになってしまいます。「さみしい」感
じを、だれの目にも見えるようにあらわすには、このうたのよ
うに、さみしく感じたことを、ありのままに写生するのがいち
ばんよいのです。

四番めのうたは、ほかのにくらべると、落ちます。実際に感じ

たけしきで、作りものではないけれども、あらわし方が少しごたごたしています。「さびしい」と言ってしまった所など、前のうたほどのふかみがないと思います。しかし、五年生のうたです。これぐらい作れば上等です。

私は、すぐMちゃんに返事を書き、「まずいどころではありません。おじさんのようなおとなにはうたうことのできないうた、あどけない美しいうたです。このままでよいから思うこと、感じたことを、氣どったり、ひねくりまわしたりしないで、すなおにありのままにうたっていきなさい。あなたがいつも使っていることばで、かぎらずに作っていきなさい。日記をつけるような氣持で、毎日作って、おじさんに見せてください。」と書いてやりました。

(二) 祭のふえ

夏の祭のじせつになりました。私たちの子供のころには、あの祭のふえぐらいなつかしいものはありませんでした。あのふえや、それからかねや、たいこのおはやしや、風船玉や、五色のこまや、はっかどうのにおいや、今思ひだしても楽しいものでした。

夏の祭は赤い金魚のおひれのようにはなやかで、まだ青いほし草のようにひなたくさい、何かしらむなさわぎのするものです。その遠くで昼の花火があがるのです。黄色いけむりの花火が。

夕方になると、いなかではたんぼの水にかえるがないて、ほ

たるがほうほうと、つみごえ
のかげからとんで出ます。す
ずしい白いはちすも、とうき
び畑の向こうから、いいかお
りをしめらしてきます。町の
方でも、大きなもも色のお月
さまの下で、わっしよいわっ
しよいとやっています。それ
が、この小田原のような海の
そばになると、そのおはやし
のあいだあいだに、ゆったり
とした波の音や、さびしい川



せのひびきやらが聞こえて、
聞いてみると、何だかこうま
よい子にでもなりそうな、ど
こまでもどこまでもみさきか
らみさきへ歩いて行ってしま
いたいような、心持になってきます。

わたしはいま、わたしのみみずくの家の赤い屋根の屋根うら
から、そうした月夜のおはやしをきいているのです。祭のおは
やしを。



祭は、子供のゆめを育てます。子供の命を、いちばん美しく
いきいきとわき立たせるのは祭です。そしてゆたかな想像を。
あの祭の前のばんのむなさわぎや、すんだあとのさびしさ、

そうしたじせつのうつりかわりも、子供が深く感じます。

あの祭のように、みなさんをほんとうにひきつけるものが、うたです。ふいてみましょう。わたしはあの祭のふえを。

わたしはみなさんとおなじ子供にならなければ、そのふえはふけません。

それだから、わたしはむかしの子供だったときのことを、思い出してふきます。

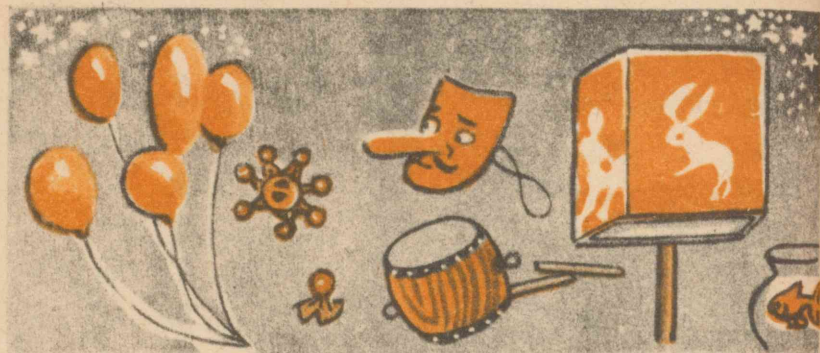
それから、むろん今はおとなになってしまったけれど、わたしのようなおとなの心と、あなたがた子供たちの心と、どこかでおんなじにさわりあうすなおな、いつまでたっても変わらないいいふえの音もあります。

それから、木や草の葉っぱや、目に見えぬほどの小さなお星

さまのまたたきや、うまおい虫やそして、白いむねのこま鳥や、そうしたものが見なさんに話しかけるいろいろなうたも、私はかわってふいてあげたいと思います。

そういう空や山や野原や、遠い海のささやき、それこそおとなしい心になって、ほんとうに赤んぼうのままの心で聞いていないと、聞こえてまいりません。そうして、そのままにそれをふえにふかねばなりません。

それにほんとうに耳や、目や、はなや、口や、それからはや指でさわってみなければ、てんとう虫のはばたきも、ねむの花の色も、ちまめのおいも、ねこやなぎのぼやぼやも、ほんとうにはわかりません。そうして、みんなが持っているわたしたちと同じようないのちの息づかいも、ちえのこころもわかり



お祭とっていいくらいに。
で、わたしはあなた方をそうしたほんとうのいい自然の祭によびよせるためにもふえをふきます。
ここにけしのたねが一つぶあるとします。あなた方はそのけしつぶをてのひらの上のせて、じっと目をつぶって、てのけしのたねが、どうなるか、どうおいたっていかを考えてごらん下さい。あの赤いきれいな花がさくまでのことを思ってみても、ほんとに楽しいものです。それとおなじように、あなた方の心の上にも、いろいろの芽

ません。ねんねのゆめにしたところで、やっぱり何か一度はみたりきいたりさわったりしたのから生まれてきます。
だから、あなた方も、ちょうどあのでんでんむしの角のように、何でもひとつひとつさわって、それからそれからと、いろいろな美しいゆめの中にはいつていかなばなりません。
ほんとうのものはみんなきれいです。そして、みんないいゆめを持っていきます。

あの祭ののぞきめがねや、ぼうずきや、風船玉に、みなさんがいつまでも飛びついていくように、いつでも、あのはりつめた気持で、空や、海や、動物、植物、それから石や金や、そうした何にでも飛びついて、ほんとうに見るといふ事が何より大切です。花でも虫でもみんないいちえを持っています。ちえの

が育っていきます。

そうして、一日一日

に、まだあなた方の

考えもおよばないよ

うな、いろいろなあす

のゆめが少しずつ近寄って

まいます。何か待たれるいい事

が、きつとあなた方を、あの祭の前のばんのように、うれしくて、うれしくて、ねむらせないでしよう。

そうしたあなた方の心の芽を育てあげるためにも、わたしはふえをふいて、あなた方といっしょに、そういういいしあわせを待っていてあげます。

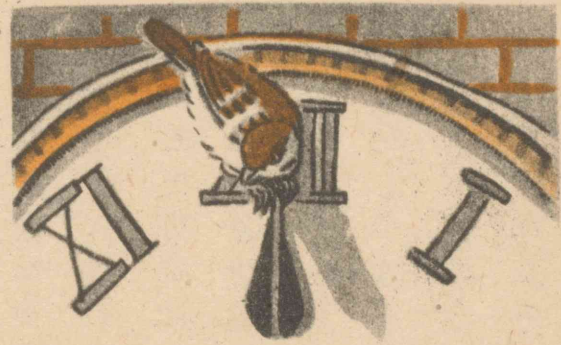


この「祭のふえ」という本の中から、そうしたわたしのふえの音をよくききわけてください。

それから、この中にはふた通りのふえの音があります。ひとつはあなた方のゆめをもっと深くもっと美しくしたいためのもの、もひとつあなた方のちえをもっとこまかく、もっとかがやかすためのもの、このふたつのわたしのふえの音が、ほんとうにあなた方の心のやしないになる事ができれば、わたしは、この上の喜びはありません。

今夜もいとお月夜です。屋根うらから下へおりると、庭は海の底のようにうす青く、それにつゆがいったばいにちらちらしています。前にはむらさきの花あやめがまっさかりです。

まだ祭のふえがなっています。



四 すすめのとけい

今から五十年ほど前のことでした。スウェーデンの有名な物理学者のベルゼリユウスという人が、フランスのパリー大学にまねかれて、パリーで講義をしておりました。

西洋では、よその国の学者でもすぐれた人でしたら、じぶんの国にまねいて、その人の学問を学ぶことがよくおこなわれます。ベルゼリユウスのばあいもこれで、スウェーデンは小さい国ですが、平和で、文化の進んだところですから、おのずとこうしたりっぱな学者も生ま

れたわけです。

さて、このベルゼリユウスが、あるとき、パリーの学校で、空気についての講義をしたことがあります。

この時、ガラスでできたつりがね形のもので、この中の空気をポンプで外へ出したり、中へ入れたりして実験する機械——これを学問上の名ではい気しようといっています。——をつかって空気の実験をしているうち、この機械の中へ一わのすすめを入れて、だんだん空気をぬいていきました。

みるみるうちにすすめは苦しみはじめました。これは、中の空気がしだいにうすくなるので、すすめの息が苦しくなっていくからです。

このまま、空気をぬいていけば、すすめの命はありません。

かわいそうにこの小さい鳥は、学問のぎせいになってしまおうです。

ベルゼリユウスの講義をきいていた生徒は、どうなるだろうかど、心配そうにみまもっています。

教室の中が、シーンと水を打ったようにしずまりました。その時、

「先生。」

こうさけんで立ちあがった生徒があります。

「なんですか。」

ベルゼリユウスは、何をいいだすかと、その生徒の方をむきました。

すると、その生徒は、

「先生、そのすずめがかわいそうです。どうか、助けてやってください。その機械の実験はもうすんだのですから。」
といました。

ベルゼリユウスは、

その生徒の情深いのに心をうたれて、

「よろしい。わかりました。だが、みなさんの意見もきいてみましょう。」

こういいながら、生徒全体を見わたして、



「ただいま、このはい気しようの中のすずめを助けてやろうという申しいでがありました。みなさんのご意見をうかがいたいと思います。……すずめを助けてやりましょうか。このまま空気をぬいてしまいいましようか。どっちにしましよう。すずめを助けてやるのに賛成の人は手をあげて。」

このことばをきいて、教室の生徒は、
「助けてやってください。」

「助けることに賛成。」

「ぼくも賛成。」

ベルゼリユウスが教室のすみずみを見まわしたところ、ひとり残らずすずめを助けることに賛成という事がわかりました。

「さあ、手をおろしてください。みなさん、ひとりも反対なく、

のこらずすずめを助けることに賛成です。わたしは、みなさんの情深いことに感激しました。ではさっそく、すずめを助けてやりましょう。」

ベルゼリユウスはほおえみながら、機械の中からすずめを出してやりました。

すると、すずめはうれしそうに、はばたきしながら、まどの外へ飛んでいきました。

生徒たちはほっとして、わっと喜びの声をあげました。

そこで、ベルゼリユウスは、すずめのいなくなった機械を前にしながら、空気の講義を続けました。

そのあくる日のこと。

朝八時少し前。パリーの方々から集まってきた生徒たちが、おくれまいと、きそって学校の門へいそいで行きました。

この時、ひとりの生徒が、いっしょうけんめいに学校をさしてかけていました。うちのつごうで朝のごはんがおくれたので、家を出るのがおそくなったのです。

この生徒は、息せききってかけているのですが、八時ちょうどには、校門までつけそうにもありません。

生徒はちこくしてはたいへんど、足を速めています。石につまづいてころんでしまいました。校舎の正面の上の方にある大どけいの長いはりが、十二時をさしました。もう生徒はちこくしてしまったと思つて、なき出しそうな顔をしました。

すると、その時、一わのすずめがどこから飛んできて、そ

の長いはりの上にとまりました。

どけいの進みがとまりました。ころんだその生徒はこれを見て、よろこび勇んで立ちあがりました。

そして、勢よくかけだしました。

この生徒が校門へはいった時、すずめはどけいのはりをはなれて、どこかへ飛んでいきました。

これこそ、きのう、ベルゼリウスにすずめを助けてやってくださいと、立ちあがってたのんだ生徒でありました。

たぶん、命を助けてもらったごおんにむくいるために、どけいをとめたのだらうとうわさされ、今でも、このどけいはベルゼリウスのすずめのとけいといわれて、パリーの名物となっています。

五 楽しい観察

(一) 夏の野道

夏がきました。だんだん暑くなりますが、からだのためには、できるだけ外へ出かけたいたいものです。野道や山道には、美しい草花がたくさんさいています。では、どんな草花がさいているか、みなさんといっしょに調べてみましょう。

まず目につくことは、黄色い花が多いことです。ニガナは、高さが三十センチばかりの草で、くきの下の方に、細長い葉がなんまいもついていて、それが、大きく小さく、いろいろにさけています。花は、くきの上にえだをはって開きますが、五つ



から八つばかりの、黄色い花びらのようなものがあります。くきや葉を折ると、白いちちのようになしるが出ますが、これをなめてみると、びっくりするほどにがいのです。ニガナという名は、これからおこつ

たものですが、なめても毒ではありませんから、だいじょうぶです。

道ばたに、糸のような細いくきで、はいながらひろがっている草に、ジシバリというのがあります。葉は、たまご形のもあり、まるい形のもあります。タンポポの花を小さくしたような花です。春のころからさき続いでいて、どんどんふえてい



きますが、ジシバリという名は、地面に糸をしばりつけたよう
になってゐる形からおこつたものです。これによく似た草が、
田のあぜなどにもたくさんはえていますが、葉も花も大きいので、
オオジシバリといひます。これは、葉がタンポポのよう
に切れてゐることもあります。ジシバリからも、オオジシバリか
らも、ニガナと同じようなちちが出ますから、一度みなさんで
そのあじをためしてごらん下さい。



コウゾリナという草も、このごろた
くさん見られますが、これは、ジシバ
リやオオジシバリなどちちがつて、まっ
すぐに立って、たいへんじょうぶな草
です。高さは、六十センチから九十セ

ンチにもなりましょう。くきにも葉にも、かたい毛がたくさん
はえていて、さわればざらざらして、あまりいい気持ではあり
ません。手でも切れるような感じですが、コウゾリナという名は、
カミソリからかわつたものだといわれます。花は、やはりタン
ポポを小さくしたくらいです。

ノゲシという草も、タンポポのような花を開きますが、形は
アザミに似てゐます。しかし、アザミのようないたいどげはあ
りません。高さは一メートルぐらいになって、くきは、竹のよ
うに中がからになってゐますから、ナイフで切つてごらん下さ
い。切ると、コウゾリナもノゲシも、やはり白いちちが出ます
が、これもけつして毒ではありません。

クサノオウという名の草があつて、よく石がきの間などから

はえていますが、花は、アブラナの花を大きくしたようなもので、黄色い四まいの花びらです。この草のくきや葉からは、ちぢでなく黄色いしるが出ますが、これは毒ですから気をつけなければいけません。しかしいくら毒でも口にさえしなければだいじょうぶですから、毒へびでも見るようにこわがらないで、よく手にとつてごらん下さい。たいへん美しい花です。



へびといえ、へびイチゴという草のあることを、みなさんはよく知っているでしょう。ちょうど今、こまかいつぶつぷのある、赤いまるい実がじゆくしているとこです。よく、この実を毒だと思つてこわがつている人が多いようですが、ほんと

うは毒でもなんでもありません。口に入れてもかまわないのですが、おいしい味はありません。名まえがへびイチゴというので、へびのようにきらつている人さえありますが、けつしてそんなにいやがることはありません。よく見ると、まったくかわいいものです。ことにその花は、今までお話したものと同じように、黄色い小さい五まいの花びらで、四月から五月ごろまで開いています。みなさんは、へびイチゴのことをよく覚えていて、かわいがつてやつて下さい。

黄色い花のことばかりお話しましたから、こんどはべに色やもも色の花についてお話ししましょう。

それには、アザミの中でいちばん早く花を開くノアザミがあります。ノアザミの花の一つ一つはとても小さいものですが、

それがかぞえきれないほどたくさん集まって、べにむらさき色のぼたんばけのようになっているところは、まことにみごとなものです。ヒレアザミという名のアザミも、このころ開いて、花はノアザミに似ています。くきには、下から上まで魚のせびれのようなものがなん本もついている、おもしろいものです。ノアザミでもヒレアザミでも、葉にとげがあつて、さわるととてもいたいものですから、花を見る時は、葉に注意しましょう。またこのごろ、色はうすもも色で、つりがね形の花を下向きにさかせている草をよく見ることがありますが、ホタルブクロというものです。みなさんのような子供たちが、ホタルをつかまえて、この花のふくろに入れて、家に持って帰る地方があるので、この名がついたのです。ホタルが出るころ、この花が野

原にさくのは、なかなかおもしろいではありませんか。

つぎはむらさき色の花。このごろの野原では、ウツボグサと

いうのがいちばん目につきます。くきの高さは二十センチから三十センチぐらい。だ円形の葉をくきに向きあわせてつけています。花はくきの上にたくさん集まって、ほになつていますが、その一つ一つを見ると、犬が口をあけて舌を出した

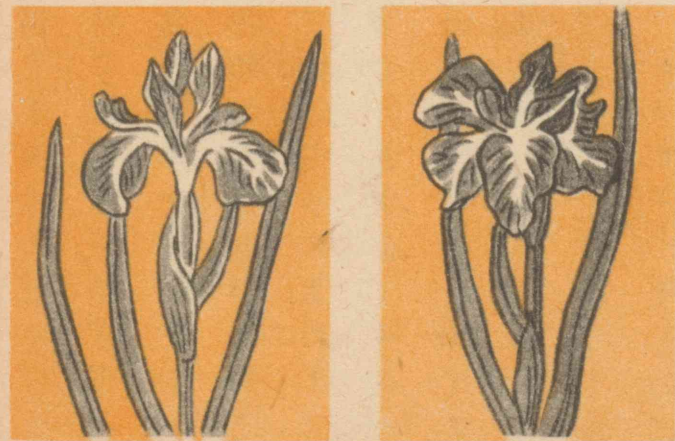
ような形で、とてもおもしろいものです。

ウツボグサという名は、花がたくさん集まった形が、ウツボというものに似ているからつけられたものですが、みなさんはウツボというものを知つ



ていますか。もし知らなかったら、先生にきいてください。先生は、きつと、むかしのむしゃ絵を見せて説明してください。でしょう。ハナシヨウブやアヤメなども、このごろ見るむらさき色の美しい花ですが、これについては、お話するまでもありますまい。ハナシヨウブとアヤメとは、どちらがいますか。みなさんでよく調べてください。

いちばんおしまいに白い花ですが、林の中などに、イチヤクソウという花がさいています。小さいウメの花のようなのが、下向きにいくつかのほにな



ってさいているのは、なかなかかわいいものです。ユキノシタの白い花も、ちょうど今ごろです。

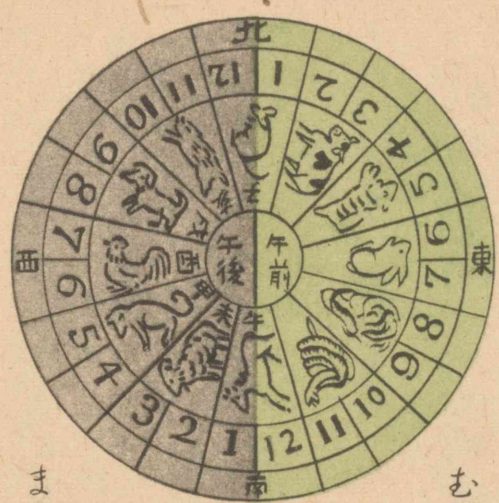
この花の花びらはとてもかわっていますから、みなさんも、自分でよく見てください。その厚ぼったい葉は、天ぷらにあげるととてもおいしいものです。これは、おかあさんに手伝っていただいて、実験してください。

(二) 海の星の名

「桑名屋徳藏は、江戸時代に大きかにいた、名高い船頭です。大きかの桑名屋徳藏といえは、

『ああ、星を見ながらあら波を乗りきる名人か。』
と、遠い港々まで、その名が鳴りひびいていたのでした。

徳藏は星をよく知っていました。その星の中でも、いつもネノホシをにらみながら、大きな船を進めていました。ネノホシというのは、今の北極星のことです。



むかしは、時間と方角をいうのに、「十二し」といって、ね・うし・とら・うさぎ・み・うま・ひつじ・さる・とり・いぬ・いのち——という十二の動物の名をつかっていました。今でも、ま昼を正午といいますが、午はうまで、ま昼の方角のことです。そこへ太陽がくると、うまの時こくて、今の十二時というわけです。ねは子で、うまの反対のま北のことです。それで、その方角

に光っている北極星を、ネノホシというわけです。

ところで、ネノホシを見つけるにはどうしますかね。」

話がきゆうに質問になったので、ぼくはちよつとまごついたが、すぐ、

「北と七星の指極星をもとにします」と答えた。

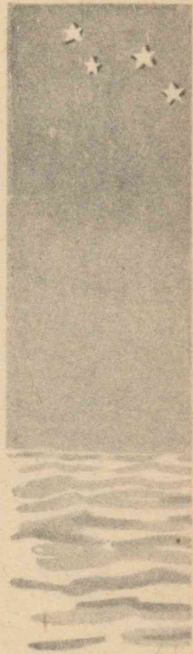
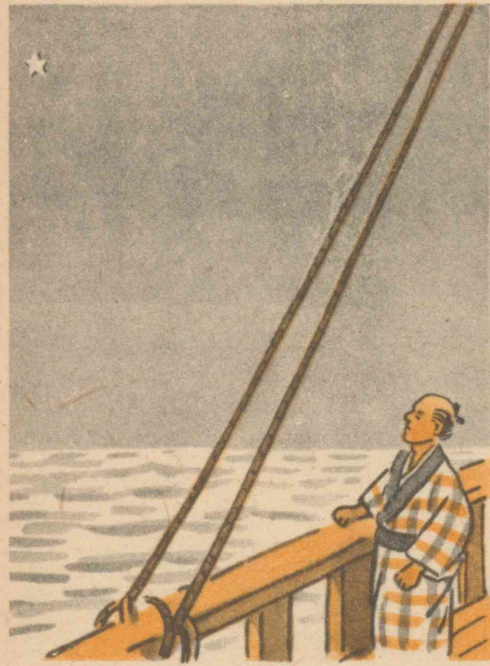
「そうですね。しかし、むかしの船乗りは、北と七星なんて名は知らないのです。シソウノホシと聞いていたものです。シソウは四三で、そら、北



と七星は四つの星と三つの星がつながってできていますね。それで、そんな名がついていたのです。もうひとつ、ネノホシを見つげるのに、北と七星とは、反対がわにあるカシオペヤの星をつかうことを知っていますか。」

「名は知っていますが……。」
というど、

「そうですね。あの五つの星は船のいかりの形に見えるので、船乗りはイカリボシといっていますよ。徳藏はこういうシソウノホシや、イカリボシで、



ネノホシをたしかめては
はるばるとえぞへ——
今の北海道ですわ、コン

フヤニシンの買い出しにいった。

ところで、それについて、こんな話があるのです。」

といって、お客さまは、おばさんの運んできたお茶をひと口飲んだ。

「さて、徳藏も船頭としてはえらかったが、その妻がまた、なかなかかしこい女だったのです。徳藏は、あらしのぼんでも、ほで、向かい風を利用して船を走らせる名人でしたが、それもこの妻が布をぬい、はりをつかって発明したものだとい

ひょうばんさえありました。

ある時のことでした。徳藏がえぞへ出かけていたるすに、妻はトンカラリン、トンカラリンとはたをおりながら、ときどき北がわの、こうしまどを見上げて、そこに、一つ光っているネノホシを見て、

『あのかたは今ごろ、どこの海を走ってられるかしら。今夜もきつと、あのお星さまを見ていられるだろう。あのお星さまは一年中空のひとところについて、船をみちびいてくださる。』

と、つぶやきました。

そうして、妻は一心にはたをおり続けてから、しばらくして、またまどを見あげると、思わず、『オヤッ』と声をあげました。



ネノホシが見えなかったからです。どいって、空がくもってきたわけではない。すこし顔を横へやってみると、ちゃんと見えている。つまり、ネノホシが、いつのまにか動いて、まどごうしのかげにかくれてわけです。

ネノホシが動いた。いつの日でも、ひとところにいるお星さまのはずだのに。

妻はすっかりおどろきました。けれど、まだ信じられないので、はたおり台に、じつとこしかけたまま、一心にそのまごうしを見つめていました。すると、やがて星は、こうしかげをとおりぬけて、一方に見えてきました。

もう、うたがいはない。ネノホシが動いたのです。これは船頭の妻には大発見で、同時に、この動く星をたよりに船を走らせている、おつとのが、心配になつてきました。船には方角ということが何よりだいじです。初めは、わずかのくういでも、それがつもと、しまいには、船がとんだけんとうちがいのところを走っていることになりますからね。

徳藏の妻はすっかりした女でした。そのあくるばんは、ねむくならないように、水を一ぱい入れたたらいの中にすわって朝までネノホシを、じつと見つめていました。その結果、動くには動くが、二本のこうしの間ほど動いて、またあともどりするといふことを発見しました。

それで、やつと安心しました。おつとがえぞからもどつて来ると、さつそくその話をして聞かせました。

徳藏はびっくりして、それはいいことを教えてくれたと、方方の船乗りたちにも、それを知らせてやつたといふことです。こういうわけで、今でもわたしたちのなかまで、ネノホシといふと、徳藏とその妻の話がときどき出るのです。

六 観光日本

(一) 国立公園

父は会社の用事で時々あちこちへ旅行する。ぼくは、父からまだ行ったことのない土地のけしきや、めづらしい話を聞くのが何よりの楽しみだ。

みやげにもらった絵はがきや写真などが、本ばこの引出しにつままっている。時々出して地図とくらべあわせて見るが、ほんとうにそこへ行ったような気持になる。学校から遠足に行っても



うれしいのだから、遠い所へ旅行したらどんなに愉快だろう。

この間、東京のおじさんが、国立公園のアルバムを送ってくださった。ぼくは、いつもそれを見ている。美しい山や川、森や林、ひろびろとした海や湖など、何度見てもおもしろい。

きのうもアルバムを見てみると、父がここにこしながらそばにきて、

「あきらは、そのアルバムがよほど気に入ったね。」

とおっしゃった。

「おとうさん、ぼく、ひと所でいいから、行っ

てみたいなあ。」

ぼくがこういうと、父は、

「今に大きくなったら行けるよ。せまい日本だが、それをみんな見るのはなかなかたいへんだ。わたしだってまだ、いくつも見っていないからね。」

といって、アルバムを手にとってごらんになった。

「おとうさん、国立公園は、だれがきめるのですか。」

「それは、国立公園をきめるための委員会があるのだよ。そこでいろいろ調べて、ねうちのがある所をきめるのだ。」

「けしきのよい所は、みんな国立公園になるのですか。」

「そうかん単にはいかない。国立公園になるのには、いろいろ条件がいる。日本は小さい島国だが、けしきのいい所がた

くさんある。けれども、それを一々国立公園にするわけにはい
かない。国立公園は国のきめる
公園だからね。」

「では、国立公園には、どんなところ
がえらばれるのですか。」

それには、まず第一に、日本の
風景の代表となるような所でな
ければならない。また、そこへ
行くと、ふだん見られないよう
なけしきが見られて、見物人が
心から感心するような所でなけ



ればならないのだよ。同じようなけしきの中でも特にすぐれているもの、たとえば、海なら海、山なら山のけしきで、どこよりもすぐれていること、それから、場所が広々としてい
ること、けしきに変化があつて美しいことなどが大切だ。日
本人だけが、いくら美しいと思つても、外国の人たちが見て
感心するようなどころでなければ、国立公園としてのねうち
はないのだよ。」
ぼくはなるほど思つた。

「外国にも、大きな国立公園があるでしょうね。」

「あるとも。美しさからいつても、大きさからいつても、世界
の公園といわれるような所があちこちにある。ただ、日本は
国は小さいが火山国で変化があり、海と山の両方のけしきを

合わせているので、日本らしいけしきのよい所がたくさんあ
るわけだね。しかし、ただけしきがよいだけでは、国立公園
としてはまだ足りない。いくらけしきがよくても、見物人が
めつたに行けないような不便などころではだめだ。たくさん
の人たちが一度に見物に行けて、空気もよく、からだのため
にもなり、いろいろ楽しめる場所があるとこころがよいのだよ。た
とえば、さんぽをしたり、魚をとったり、温せんにはいった
り、ゆつくりとどまることのできるような便利な設備がなけ
れば、見に行く人が少ないからね。」

ぼくは、この話を聞いているうちに、国立公園の写真の中に
見物人が、楽しそうにうつつているのが多いことを思ひだした。
「自然のけしきがよいだけでなく、いろいろめずらしい物のあ

ることも、大切なことだ。たとえば、むかしからそのまま残っている有名なたて物や、れきしのあとや、めずらしい動物が住んでいたたり、めずらしい植物のあったりすることなども国立公園として大切な条件の一つだよ。」



父の話で、ぼくは国立公園のねうちのあることがだんだんわかってきた。「あきららは、国立公園の名まえと、それがどのへんにあるか知っているかね。」
「みんなて十七ばかりあります。地図を見て調べたので大体の位置は知っています。」



「それはえらい。北は北海道から南は九州まで、国立公園はそれぞれの土地の代表のように、おたがいにその美しさをきそっている。しかし、まだ、国立公園にきまつてから日が浅いので、ほんとうに公園らしく、日本人のだけれどもがかん単に行けるようになっていないのが残念だ。だから、せまい日本の中でさえ、北海道の人は、あかんや大雪山は知っているが、九州のあそや雲ぜんなどはあまり知らないし、日光やふじ山を知っている人も、せと内海や十和田湖の美しさを知らない人があるというようなわけだ。遠い国立公園を知らないだけでなく、近くの国立公園さえ、ほんとうによく知ってい

る人は少ない。そのためには、もっと交通を便利にし、設備をととのえて、だれでも気軽に旅行できるようにしなければならぬ。

ぼくはほんとうにそうだと思った。そうして、早く日本中の国立公園が簡単に見られるようになればよいと思った。

「これからは、外国人にもどしどし見物にきてもらわなければならぬ。せつかく日本にきて、国立公園を見ようと思つても、あまり不便なところでは、お客さんもつまらなくなるだろう。日本という国をよく知つてもらうためにも、国立公園をもつとりっぱにしていくことが大切だ。あきらまなく、よいアルバムを持つてゐるのだから、いろいろ研究してごらん。」父はこういって、次ぎの間へ行かれた。

ぼくは、またはじめからアルバムをゆつくりとながめた。いろいろなことがかかつて、アルバムが一だんと美しく思われた。

ぼくは大きな紙に、日本の地図をかき、それに国立公園の絵や写真をそれぞれの場所にはりつけて、そこへ行く道すじをかき入れようと考へつゐた。ぼくは、ほんとうに旅行したような気持になつてうれしかった。

(二) 十和田湖行き

夏の朝であつた。

青森駅の前から出る、十和田湖行きの乗合自動車に乗りこんだ。大きくて、明かるい自動車であつたが、乗る人がいっぱい

なので、身動きもできなかった。

青森の町はずれをはなれて行くど、道はだんだんのぼり坂となり、いつのまにか、はっこうだ山のふもとをのぼるようになった。

そのあたりは、夏草が燃えるようにしげっていた。その中を馬があちこちに遊んでいた。よくいう南部馬である。のぼり坂がだんだん急になり、道がせまくなり、両側にしげっている木のえだが、ざわざわと、自動車のまどにふれたりした。



海ばつ一千八百メートルの大だけをこえる時は、いかにもすずしい風がふいていた。ここらは、いったいにしんようじゅがはえている。その木の形がおもしろい。根元の方が太くて、それが上にのびると細くなってしまう。えだの出ぐあいも、下の方がわりにひろがっているが、上の方になると、すぼめたように細くなっている。いわば円すい形になっているのだ。これは、寒さと雪のためにしぜんこうになったのだと、そばにいた人が話をしていた。自動車がとまった。

乗客たちはみんな自動車からおりた。案内の女車じょうさんにつれられて、「すいれんの池」を見にいこうというのだ。



どこかで「カッコー カッコー」と、かんこ鳥が鳴っていた。
すいれんの池というのは、あまり大きくなかったが、天然の
池で、水はきれいにすんでいた。ほったのではなく、水が、ひ
とりでにくぼ地にたまつたと
いったかたちで、さざなみが、
地面とすれすれにただよって
いた。池には、すいれんのま
るい葉が、なんまいもういて
いて、ところどころに赤い花
がさいっていた。



池のまわりには、すいすいとした草がたくさんはえていて、
その向こうには、はっこうだ山のみねがそびえ、雪がまだ残っ

ていた。

よく伝説で、天人が空からおりてきて、こ
ろもをぬいで遊ぶというのがあった。もし天
人が地上に池をもとめるならば、こんな
美しいやさしい池ではあるまいかと思っ
たりした。

それから、自動車に乗って、どんど
ん行くと、川のそばに出た。川の名は
おいらせ川という。

おいらせ川は、水もきれいだ、川
の中の岩にはえているこけの美しさは
また格別である。あのように、こけが



よくついているのは、川の水かさが、いつもきままっているからである。ひどく水が増したり、または、ぐんとへったりしては岩の表面が水に現われておちつかないので、こけもはえてこない。

川の水は、岸の道の高さほどのところを、波だてて流れている。道を行く人が岸にこしをかけて、足をたらせば、川の水は足の先をひたひたとあらうほどである。

十和田湖は、わ

き水のたまった湖だといわれ、その水があふれ、流れて、おいらせ川と



なっているのだから、水のすきとおって、すんでいるのは、おどろくほどである。

十和田湖に着く

までに、道の両側に、七つばかりのたきがかかっていた。その一つ一つのすがたが変っていておもしろかった。

乗合自動車が、十和田湖の岸で止まった。

そこから、私たちは、船に乗り移った。

湖水の色は、ほんとうに青い。

船が動きだした。軽い機関のひびきを感じながら、こしをか



けていた。

案内役の少女が、私のすぐそばで、

「これから、この十和田湖にいい伝えられている伝説を、お聞かせいたしましょう。」

といった。少女の声は、湖の水のようによくすんでいて、聞く耳に気持がよかった。

少女の語る話というのは、だいたいい次のようなことであつた。

あるところに、ひとりの少年がいました。

おとうさんは、大きなへびで、おかあさんは、きれいな人間でありました。少年は、ある日のこと、友だちをふたりつれて、山にたき木をとりに出かけました。

お昼になつたので、少年は、ご飯のおかずにしようと思つて谷川で「いわな」という魚を三びきとりました。それを焼いて、友だちのもどつて来るのを待っていました。けれども、友だちは、なかなかもどつてはきません。少年は、いわなが、あまりおいしそうなにおいがするので、三びきのうち、一びきだけを先に食べてしまいました。ほおがおちそうにおいしく食べました。そこで、残りの二びきのいわなも食べてしまいました。すると、どうしたものか、のどがかわいてきました。

少年は、手おけの水をすくつて飲みました。けれども、のどのかわきはとまりません。少年は、谷川にいつて、流れに口をつけて、しゅしゅ、しゅしゅと水を飲みました。いくら



飲んでも、飲んでも、のどのか
わきはとまりません。次ぎの日
も飲みました。その次ぎの日も
飲みました。どうとう、七日七
夜のあいだ、続けざまに谷川の水
を飲みました。

ところがどうでしょう。少年のから
だは、いつのまにか大じゃに変わっていま
した。少年は、大じゃに変わってしまった自
分のからだを見て、悲しみました。もう、お友だちに会うこ
ともできないと思つてなきました。なんとか、もう一度だけ
人間のからだになろうといのりりましたが、人間にはもどりま

せんでした。

そこで、少年は、あきらめて、湖の主になろうと決心しま
した。そうして谷川をさかのぼり、いま、みなさんのいらっ
しゃるこの十和田湖の主になったのであります。

少年の名を、ハろう太ろうといいました。ハろう太ろうは、
この美しい湖水を、自分の住家として、何年かの月日をおくっ
たのであります。

ある時、ひとりのおぼうさんが、十和田湖の岸に現われま
した。

おぼうさんは、修行のためにこの湖の主と戦わなければな
りませんでした。

そこで、ハろう太ろうとおぼうさんとは、はげしい戦いを

始めました。空がにわかにくもってきて、大あらしとなってしまいました。ハろう太ろうもこの湖の主です。おめおめと立ち去ることはできません。おぼうさんも、この湖の主をせいばつしないど修行にはなりません。どちらもひっしです。



その時、おぼうさんは、お経をとり出してそれをハろう太ろうに投げつけました。するとお経の文字が一つ一つみんな、けんになりました。そうして、その小さなけんが、みんな



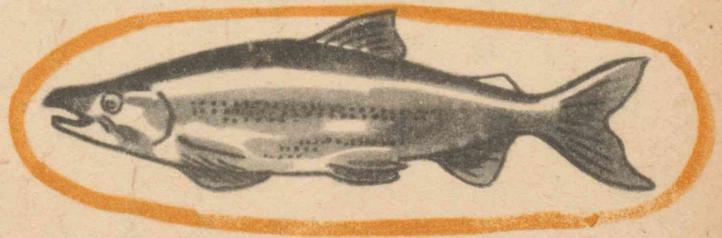
なハろう太ろうのからだにつきささりました。これには、ハろう太ろうもかありませんでした。どうどう住みなれた十和田湖をのがれました。そうして遠いところにある湖をさがして、そこにうつり住むようになりました。ハろうがたという湖が、それだということです。

私は、湖の岸をうずめている青草を見たり、その向こうにもりあがっている白い雲を見たりして、この物語に聞きとれていました。湖の中につき出ているおぐら半島をまわったりして、船は

進んでいった。そのとちゅう、岸のかけが、赤い色をしているのを見つけた。案内の少女の話によると、ハろう太ろうがにげて行く時に通ったがけだという。赤いのは、その時にそまった血の色であるという。

十和田湖ホテルのひとへやにすわって、湖をながめると、またちがった美しい感じがした。お昼の食事に、この湖で養しょくしているといひひめますの料理がついた。

私は、ひめますにはしをつけながら、伝説の主のハろう太ろうが、いわなを食べた時のことをふと思ひ出したりした。せみが、あたりいっばいに鳴いていた。



七 人類愛

(一) ジェンナー

エドワード・ジェンナーは今から二百年ばかりまえ、千七百四十九年に、イギリスのバークレーという所で生まれました。おとうさんはぼくしてしたが、ジェンナーがまだおさない時になくなったので、そののちは兄に育てられました。十五才の時、外科の先生について医学の勉強を始めました。二十二才の時、ロンドンに出てハンター先生の弟子になりました。

そのころ、アフリカたんけんで名だかかったフックが二度め

のアフリカたんけんに出かけるについて、動物や植物のことを受け持つ人をさがしていましたが、それにはジェンナーがよいだろうという話ができました。まだわかいのには、有名なフックたんけん隊に加えられるのは、たいへんほまれになるのですが、ほまれということなどを、少しも心にかけないジェンナーは、それをことわって、自分の生まれた美しいいなか町、パークレーに帰って医者を始めました。

医者としての力は十分にありますが、それに親切でしたから人々からうやまわれ、また、親しまれました。フックたんけん隊にさそわれたことでもわかるとおり、ジェンナーは動物や植物をよく見て、調べるのが大スキです。たとえば、カッコウがひなを育てる方法などを熱心に見て調べました。カッコウは

自分ではすを作らないで、ヨシキリとか、ハクセキレイとか、ほかの鳥の作ったすの中へたまごを生んで、それをそのすの主の鳥にかえしてもらい、育ててもらおうというみょうなくせをもっています。これはジェンナーが調べたことです。

医学のことでは、前々からジェンナーの頭をはなれないことが一つありました。それは牛とうという、牛の病気のことでした。これはちち牛のちぶさにできる、おできですが、なにも手当をしなくても、じきになおってしまう、軽い病気です。牛のちちをしぼる人々にうつることもありますが、手先に二つ三つおできができるだけで、これもじきになおります。こんな軽い病気のことを、なぜジェンナーが、ねてもさめても考えていたかという、それはこういうわけです。

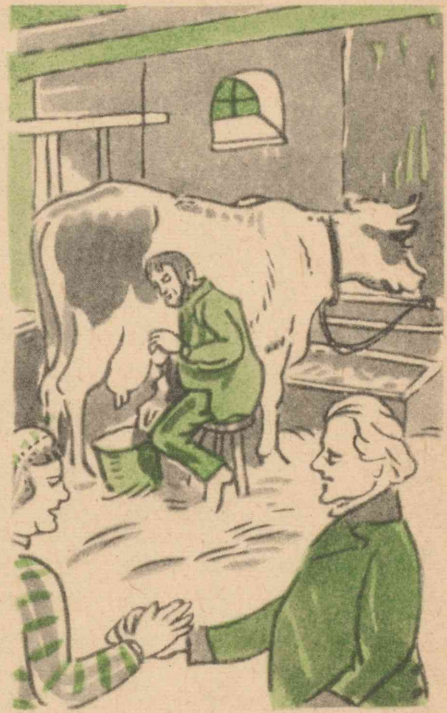
病気には、うつる病気と、うつらない病気とありますが、うつるほうの病気は一度かかると二度とはかからない、あるいはかかりにくくなります。しかし二度とかからないというのは、はじめにかかった病気にだけ二度とかからないので、ほかの病気にはかかります。たとえば、コレラに一度かかった人は二度とコレラにはかかりませんが、チフスやペストには特別かかりにくくなるのはありません。そこで、牛とうですが、牛のちぶさからうつって、この病気に一度かかった人は、少くとも、しばらくの間は、二度とは牛とうにかかりません。それはふしぎではありませんが、そういう人は天然とうという病気にもかからなくなるらしいのでした。

天然とうというのは人間の病気で、からだじゅうに、数えき

れないほどたくさんのおできができて、十人にふたりか三人のわりで死ぬという、重い病気です。

つまり天然とうは牛とうとは別の病気です。だから牛とうに一度かかったからといって、天然とうという別の病気にまでかからないようになるはずがありません。ところが、実際には、天然とうにもかからなくなるらしいのです。このことは、ちちしぼりの女や農夫らの間に、いい伝えられていました。しかしほんとうにそんなことがあるのかどうか、だれもためしてみようと思う人はありませんでした。むしろ、医者たちは、農夫らが何といおうとも、そんなことはあるまいと、きめてしまっていたようです。

ジェンナーがまだ外科の先生のところで、医学の勉強をして



かかったことがあるんですもの、天然とうにかかるはずがな
いではありませんか。」
ときっぱりいいました。

ジェンナーは、これはふしぎなことだと思いました。ほん
にそんなことがあるのだろうか、何かのまちがいはあるまい

か。なつとくがゆくまで、調べようと考えました。農夫も医者
も、だれひとりふしぎに思わないでいたことを、ジェンナーは
ふかく、ふしぎに思ったのでした。ジェンナーがまだ二十才に
ならないころのことでした。

それからは、このことがジェンナーの頭からはなれませんが、
牛とうのこと、天然とうのことは、特に注意ぶかく見ていまし
たが、四十才を過ぎるころからは、この研究にわき目もふらな
いようになりました。

まず、牛とうという牛の病気が、ほんとうに人間にも、うつ
るかどうかを調べ始めました。パークレーの町のあたりは、ち
ち牛の間に牛とうがはやることが時々ありました。そうすると
ジェンナーは農園へ出かけて行って、牛とうにかかっている牛

いたところ、ある日病人
がみてもらいにやってき
ました。先生とジェンナ
ーとで、これは天然とう
らしいと、首をかしげて
いますと、その病人が、
「だって、私は牛とうに

を見たり、農園にやどわれている男女が、ちちをしぼるところを見たり、またその人々の手先にできたおできを調べたりしました。また、そのおできの手当をしてもらいに來る人々から、どんなぐあいにして、そのおできができたかを聞いたたり、どんなふうにしてなおるかを見たりしました。念のために、年よりの農夫や、ちちしぼりの女たちにも、ずっと以前のことをたずねてみました。

こうして、牛の牛とうは、たしかに人間にうつること、そして人間にできるおできの一つ一つは、天然どうのおできそっくりだけれども、決して天然どうのように、からだじゅうにひろがらないことをたしかめました。

そこで人間が牛とうにかかると、天然どうにかからなくなる

という「なみはずれたこと」が、ほんとうにあるかどがを、調べることにとりかかりました。天然どうにはかかったことが、なくて、牛とうにはかかったことのある人々を選んで、うでにかすりきずをつけて、そこへ天然どうのおできのうみをつけてみました。今から考えますと、天然どうのようなおそろしい病気を人にうつすところみなど、思いもよらないことですが、そのころは、天然どうを防ぐ方法がほかになかったのです。これは、つまり、ほんとうの天然どうにわざわざかかるのですから、軽くすめばよいが、重ければ死ぬこともあるわけ、ずいぶんあぶないことです。とにかく、そのころは、これが、ごくあたりまえの天然どう予防法だったので、ジェンナーもへいきで、人のうでに天然どうをうつけてみることでできました。

さて、そういうふうにして、長い間かかってたくさんの人々を調べたすえ、牛とうにかかった人は、天然とうの病人といっしよにね起きしても、天然とうにかからないし、うでにわざわざ天然とうのうみをつけても、かからないことがわかりました。それから、こんどは逆に、天然とうにかかると牛とうにかからなくなることを、たいへんていねいに調べました。

こうしてジェンナーは、天然とうと牛とうとは病氣としては別々の二つの病氣だけれども、どこかに共通なところがあるとみえて、どっちか一つの病氣にかかると、もう一つのほうにもかからなくなることを知りました。どうしてこんなことがおこるのでしょうか。ほかの例でいえば、一度コレラにかかると、ベストにはもうかからないなどというのと同じで、わけのわか

らないことです。ジェンナーはその後も、このわけを考えたり調べたりしましたが、結局はよくわかりませんでした。

このわけがわかったのは、それから百年以上もたってからです。

ジェンナーはまえに、カッコーがどんなにしてひなを育てるかを調べましたが、それを調べて、どうしようと思ったのではありません。動物や植物について、なっとくできないことを調べて、ほんとうはどうなのかを知ることが楽しくてたまらなかつたのです。牛と



うと天然どうの関係も同じことで、「ほんどうはどよなのか」を、はつきり知りたくて、調べはじめたのでした。ところが、牛どうにかかると、天然どうにかからないことがわかってみると、これを応用して天然どうを防ぎたい、天然どうを防ぐことができたなら、人々はどんなに喜ぶだろうと思ふようになりました。

さあ、そうになると、早くその方法をきめたい。そして早く世界中の人々を喜ばせたいと、心がせくのがふつうです。ことに、ジェンナーのように、やさしくて、親切な人なら、早く早くと思つたにちがいありません。ところが、ジェンナーの研究ぶりは相変らず用心ぶかくて、おちついていました。

まず、牛どうを人間にうつすには、どうしたらよいかをたしかめました。人間はあやまって牛から牛どうをうつされること

はありますが、人工的に、思うままに人間にうつせるかどうかは、やってみなければわかりません。ジェンナーは、いま、みなさんが種どうを受けると、あのやり方で、牛どうを人間に、まぢがいなくうえることのできるのを知りました。そして人間に牛どうをうえると、うえたところにおできができるだけで、天然どうのように、からだじゅうにひろがらないことをたしかめました。

そのようにして、一度牛どうをうえた人に、あとで天然どうをうえてみましたが、もちろん天然どうにはかかりませんでした。ジェンナーの長い研究のうち、このところだけが、後の世にいいはやされて、たいへんあぶないころみかみごとに成功したように伝えられています。みなさんも、もうおわかりの

とおりに、ジェンナーがこのころみをした時には、だいたいのことはもうわかっていたのですから、ジェンナーにとっては、とりたててあぶないことでもなければ、また、おどりがあって喜ぶほどのことでもありませんでした。ジェンナーは人の命にかかわるあぶないころみをやったから、それでえらいのではありません。反対に、初めから終りまで、おちついて研究し、決してあぶないころみなどはしなかったのがえらいのです。

ところでジェンナーは、これでもまだ安心できませんでした。それは、牛とうと天然とうとは、別々の病気だとはいうもののに、かくたいへんよく似ているし、どこか共通のところがあるはずですから、牛とうを牛から人へうつし、そのあと、人から人へつぎつぎにうつしうえるうちに、天然とうのような、重い



病気にかかるかもしれ
ません。それでジェン
ナーは牛とうを子供か
ら子供にうついでみ
ましたが、そんな心配
はいらないことがわか
りました。

これだけのことを念
入りに調べてから、やっ
とジェンナーは論文を

書き、自分の費用で本を出して人々に読んでもらいました。
千七百九十八年、ジェンナーが五十才の時のことです。

かれがこの問題を考え始めてから三十年あまりたっています。この本こそは、伝せん病のために、すっかりとすえられた第一の土台石です。しかし、そのころの学者たちの知識は、まだジェンナーの研究とはとてもかけはなれていたので、本は読まれても、牛のおできなどを人につけたら牛になってしまふとか、またはからだじゅうにひろがって天然とうと同じことになるとか、さまざまな悪口をいわれましたが、ジェンナーは一生の半ばをついやして、自分の目で見、自分の手でふれ、しっかりとたしかめたことなので、少しもうろたえませんでした。もちろんジェンナーのいうことをほんとうだと思ふ人もたくさんあったので、よく年ロンドンに種とう所というものができ、一万九千人の人々にジェンナーの方法で種とうがおこなわれました。

そしてなお、そのうち五千人には、あとで天然とうをうえてみました。が、ひとりもかかりませんでした。間もなくイギリスじゅうの町々で種とうをおこなうようになり、ついで、ほかの国へもひろまっていきました。

ジェンナーが種とう法を発表してから四年め（千八百二年）に、イギリス国会は、ジェンナーの手がらをたたえるために、賞金をおくりました。そして、どこの国でも、ジェンナーの名を知らないものはないほどになりました。

ジェンナーがなくなつてから三十年あまり後、千八百五十七年に、人々は、ロンドンのトラファルガー広場に、ジェンナーの像をたてました。



(二) ドラねえさん

「ドラねえさん。」

かの女は大勢のかん者からそうよばれて
いました。

かん者たちにとって、かの女はただのかん護婦ではありませ
ん。親切なかいほう人、いや、それだけではありません。ゆき
とどいた世話人、それでもまだいい足りません。それ以上なの
です。からだの苦しみや、きずのいたみのめんどうをみて、そ
れを軽くするばかりでなく、心のおくまで見とおして、そのな
やみを共にしてくれるやさしい相手でした。かん者たちが親し
みを持って、「ねえさん」とよぶのも、もっともなことでした。

かの女の本名は、ドロシー・バッチソンといました。

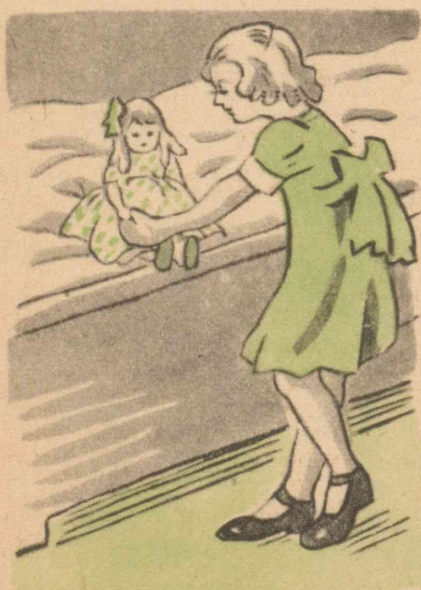
千八百三十二年、イギリスのヨークシャに、十二人のきょう
だいの十一番めの子として生まれました。

おさないころのドロシーは、かよわい子供でした。そのため
に、よくひとりぼっちで遊んでいました。ドロシーの一ばんす
きなものは、お人形遊びでした。

それも、ままごとや、お客ごっ
こではなく、お人形の病気の世
話をするこじでした。

「さあ、ねんねしてね。」

そういつて、小さいベッドに
そつとねかせます。



「さあ、おくすりをあげましょうね。」

そういって、くすりを飲ませるまねをします。からのびんにさじを入れ、ほんどうのくすりをすくうようにして、お人形の口もとへ持っていきます。

「こんなにいたいたして——。さあ、ほうたいをしてあげましょうね。」

そういって、お人形の手や足へ、ぐるぐるときれをまいてやります。そうかと思うと、また、

「まあ、おなががいたいの。今すぐによくしてあげますからなかないでね。」

などいって、静かにさすってやるのでした。こんなふうにして、一日じゆうあきもしないで、お人形の世話をしました。

ところがある日、妹がほんどうの病気になりました。それを見たドロシーは、さっそくおかあさんにいいました。

「おかあさん、わたし、妹の病気の世話をしたいの。」

「まあ、あなたにできますか。」

「できます。だってわたし、いつもお人形の世話をしてやっているんですもの。」

「お人形と生きた人間とはちがいますよ。あなたにはとてもできないうでしよう。」

それでもドロシーは、あきらめませんでした。熱心におかあさんにたのんだので、とうとうゆるされました。

いよいよ、妹のかん病が始まりました。細かいところまでよく気がつくので、妹の病気は日に日によくなります。さすが

のおかあさんも、これにはすっかりおどろいてしまいました。
「これから病気の時は、おねえちゃんに世話をしてもらおうの。」
妹は心からそういうのでした。

「ドロシーや、いっそのこと、おまえはかん護婦さんになるかね。」

おかあさんがじょうだんまじりにそういうと、ドロシーはだまって、にこにこしているだけでした。

弱かったからだは、成長するにしたがって強くなり、二十歳のころには見ちがえるほどじょうぶになりました。みんなと運動をするのはもちろんのこと、兄たちといっしょに山のぼりをしたり、馬に乗って遠くへ出かけることもすきになりました。

いつも快活で、感覚はするどく、強固な意志の人となりました。あの、人形ずきな弱々しいドロシーとは、別人のように変わりました。けれども、ただ一つ変わらないものがあります。それはかの女の精神でした。

ちようどそのころ、イギリスとロシアとの戦いが始まり、ナイチンゲールが、しょう病兵かん護のために出かけるといううわさが伝わりました。それを聞いたかの女は、さっそくおとうさんに願ひ出しました。

「私も戦地に行かせてください。」

しかし、おとうさんはそれをゆるしませんでした。

「おまえはまだ年もわかすぎるし、わざもみじゆくだ。もっと修行を積んでからでなければ、じゅうぶんお役に立つことは

できない。

かの女はしかたなく思い止まりました。やがて、長い間の望みがかなえられることになりました。グッド・サマリタン病院のかん護婦養成所へはいることができたのです。それはかの女が三十二才の時でした。

二年間の勉強がすむと、いよいよワルカル炭こうの病院に就職することになりました。

そこは以前は、木の青々としげった美しい所でしたが、今では木が切りたおされ、いずみの水はかれて、長い大き



なえんとつが立ちならび、赤いれんがの家がのきを連れ、黒いけむりが空をおおうありさまです。

そこで働く人たちは、一日の大部

分を地下のこう道で過ごし、あせとどろとほこりにまみれて、つかれきって帰るのでした。そのために、年中病人の絶え間がなく、病院はいつも満員でした。病人のほとんどはけが人でした。わかいい人たちのりっぱなうでや足が手術台にのせられて、どんどん切断されました。そういう人たちは、一生不具者でくらすなければなりません。医師から切断を言いわたされ、手術室へ運びこまれるわか者たちは、なきわめきながら医師に



いうのでした。

「先生、このうでや足が切り落されるくらいなら、ついでに私の命もなくしてください。一生かたわ者になるくらいなら、生きていない方がましです。」

ドロシーは、毎日のようにそういうありさまを見、そういうわめき声を聞かされるのです。その度に、自分の手や足が断ち切られるように感じました。悲しみのために身ぶるいをし、同情のあまり身もだえをしました。

「そうだ、私はああいう人たちの幸福のために、一生をささげよう。私は外科のかん護婦になろう。」

ドロシーは固く決心しました。

それからのかの女は、文字通り命がけて働き続けました。どんなにむずかしいめんどうな仕事でも、進んでぶつかっていききました。あの悲しいわめき声を聞くと、ただかん護するだけでは満足できませんでした。もっともっと治りよう法の研究をしなくては、あのわか者たちを救うことはできないと思いました。「どうすれば折れたほねをつぐことができるか、やぶれたにくを合わせるこゝろができるか、さけたひふをつなぐことができるか。」

かの女は手術台の実際を一心に見つめながら、疑問があればいちいち熱心に質問しました。医師たちはそのしんけんさに動かされて、医りようの実際方法をかの女に話して聞かせるようになりました。

ある夜ふけのことでした。

ひとりのわか者が、たんかのにせられてかつぎこまれました。機械でうでをはさまれ、ひどくおしつぶされているのです。

医師は、ひと目見ただけでいいました。

「これではどうにも助ける方法がない。すぐに切断しなければならぬ。」

わか者の顔色が、そのことばでさっと変りました。うううんとしぼり出すようなうめき声が聞こえました。失望と、悲あいと苦つうとで、はげしく身もだえをしました。その時、そばにいたドロシートの顔が、さっと土色に変わりました。はあっと深いため息をついたかと思うと、顔がじつとりとあせばみ、今にもたおれそうになりました。しかし、かの女のするどい視線は、じいっとわか者に注がれていました。

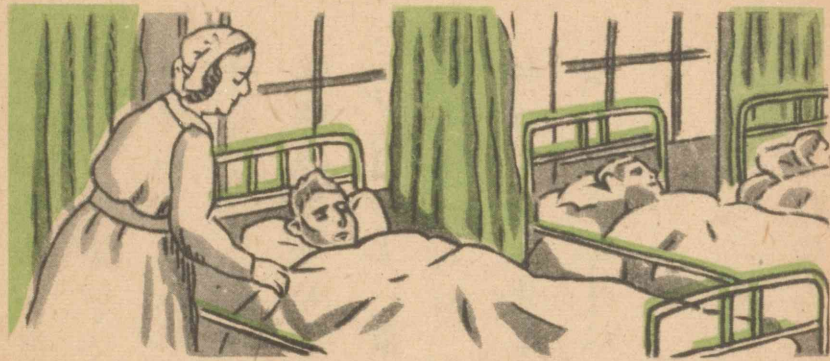
わか者はもだえながらも、自分をとりかこんでいる医師やかん護婦たちの顔を、次ぎ次ぎと見まわしました。だれか、私を助けてください、私のこのうでを切らないでなおしてください。燃えるような二つの目が、そうさけんでいました。しかし、それに答える声はどこからも聞こえません。

やがてわか者の目が、ドロシートの顔をさがしあてると、そのままぴたりと動かなくなりしました。わか者はそこに、自分の心のかげをみとめたので

「ドラねえさん。」

わか者はいきなりさけびました。

「私の手を助けてください。だいいじな右の手です。お願いです。助けてください。」



ドロシーの土色の顔に、急に血の気が走りました。両うでに力がこもって、顔をぐっと前につき出しました。大きく開いた目が、わか者のうでをじっと見つめています。その目が、おそろしいきずの下に、まだかすかにめぐっている血えきを見たのです。かの女の頭の中に、さつとある考えがひらめきました。はげしい愛情と勇気がわきあがりました。ドロシーは医師に向かってさげびました。

「先生、私にやらせてみてくださいませんか。」

医師はおどろいて、ドロシーを見ました。

「何をするのですか。」

「このきずの治りようをしてみたいと思うのです。」

「そうすれば、どうなるというのですか。」

「切らないでも助かりはしないかと思うのですが。」

「じょうだん言っちゃいけない。」

医師はちらっと口をゆがめてわらいました。

「切らなかつたらこのきずは、しばらくするとうみだして、命まで取ってしまう。この手を助けるなんて、とんでもないことだよ。」

ドロシーはひきさがりませんでした。くるとわか者の方に向きなおいりました。

「あなたはすぐ手術しますか、それとも、

私に任せますか。」

いい終らないうちに、わか者はさげびました。

「ドラねえさんに任せます。そのためなら、死んでもかまいません。」

医師はすっかり気を悪くしてしまいました。道具をガチャリとつくえの上に置くと、かの女をにらむように見ました。

「ドロシーさん、あなたがこの人を殺すようなことになっても私は知りませんよ。もう私は、このことに関係しない。」

はき出すようにそういって、きつとへやを出てしまいました。

それから三週間、ドロシーは、ただそのうでのために生きました。それはもう、「かれのうで」というよりも、「かの女のうで」

になっていました。自分でもそれを、「私のうで」とよんだのです。そのかん病には昼も夜もありませんでした。いつもうでのそばにつきつきりでした。手当をしているか、世話をしているか、そうでなければ、まくらもとにいすを寄せて、顔をふせ、目をつむり、長い間一心にいのり続けました。

わか者は絶対にドロシーを信じていました。かの女を見あげる目は、いつもすんだ水のように静かでした。どんなに苦しんでももうなり声ひとつ立てず、いわれるままに、何ごともすなおに従いました。かの女は、この信らいにどうしてもこたえなくてはならないと思いました。

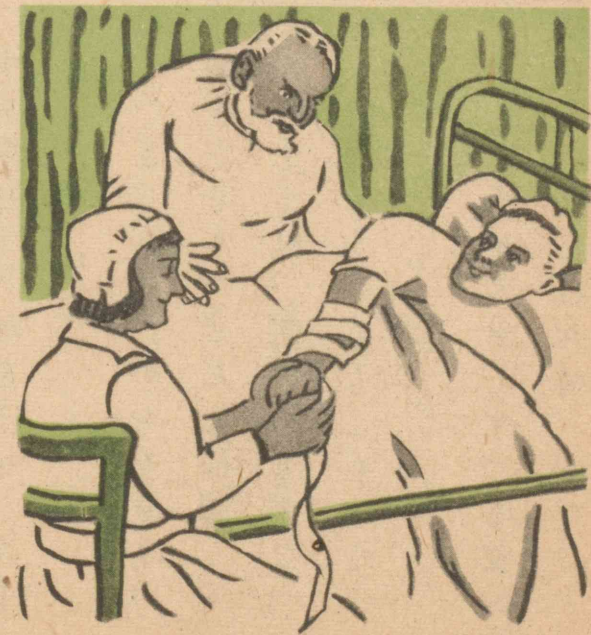
生きるか死ぬか三週間が過ぎました。やがて少しずつ希望の光が見えてきました。もう大じょうぶと思われた時、ドロシー

は医師の所へ走って行って、その経過を報告しました。そうして、

「きてみてください。」
とお願いしました。

もちろん医師はいい顔をしませんでした。自分の意見に反対したかの女に、いい感じの持てるはずはありません。

しかし、ドロシーの治りように従ったかん者が、三週間も生きているといふことは、まったくふしぎというほかはありません。「どんなふうになっっているか、行って見てやろう。」



医師はふと、そう思いはじめました。ドロシーに案内されて病室にはいりました。かん者の顔は生き生きとして、元気に満ちていました。にっこりとわらって医師をむかえました。医師のおどろきはたいへんなものでした。

ほうたいがぐるぐるとかれました。見ると、あの折れたほねも、さけたにくも、くじけた関せつも、まるでうそのようにきれいになおっていました。すっかりしたにくづきと、なめらかなひふは、健康そのもののようにかがやいて見えました。

「おや、これはどうしたことだ。」

医師は思わず大声をあげました。

そのすばらしい処置に感心して、ドロシーへの不快もいっさいとけ去り、心からわか者の全快を喜びました。

「これは助かった。このうでは生まれ変わった。」

医師はむちゆうになつて、何度もさげびました。それからドロシーのそばにつかつかど歩み寄つて、その手を固くにぎりました。

「よくやった。えらい。——たいへんだったろうね。」

カのこもつたそのことばに、ドロシーはただうつぶさばかりでした。のどがつかえて、返事ができませんでした。目がしらが熱くなつてきて、かた先が小さきぎみにふるえました。

とつぜん、

「わあっ。」

という大きな声がありました。わか者がたまらなくなつて、声をあげてなき出したのです。

それから一か月の後、ドロシー自身が病気にたおれました。長い間のつかれがたたつて、なかなか起きられませんでした。病室には「面会謝絶」のふだを出して、人々の出入を禁じました。毎日大勢の人が入り代り立ち代り見まいにやってきました。

それらの人々は、どろどほこりにまみれた仕事着を着て、まっ黒な顔をしていました。それはみんな、かつてドロシーの手厚いかん護を受けた



人たちでした。

「ドラねえさん。病気はどうかね。」

みんなは心配そうに、目を光らせてきました。

あの「かの女のうで」であったわか者は、二十二マイルほどはなれた炭こうで、もとのように何不自由なく働いていました。「かの女のうで」というあだ名で通っていて、だれも本名をよぶものはいませんでした。

わか者は、毎日曜の朝、きまった時間にドロシ一の病室を見まいました。そうして、力をこめてベルをおしました。

「あ、あれはきつと、『かの女のうで』よ。」

取り次ぎがそういって入口のドアをあけると、わか者がにこにこ立っています。

「ねえさんはどうですか。だいじょうぶですか。」

かれはきまつてこうたずねました。容態を細かく聞きとるとほっと安心して帰りかけながら、きまつてまたこういうのでした。

「このベルは、『かの女のうで』でおしたといってください。」

ドロシ一はようやくなおりました。起きるとすぐその日から職場に出かけました。

「ねえさん、もっと休まないで、また病気になりますよ。」

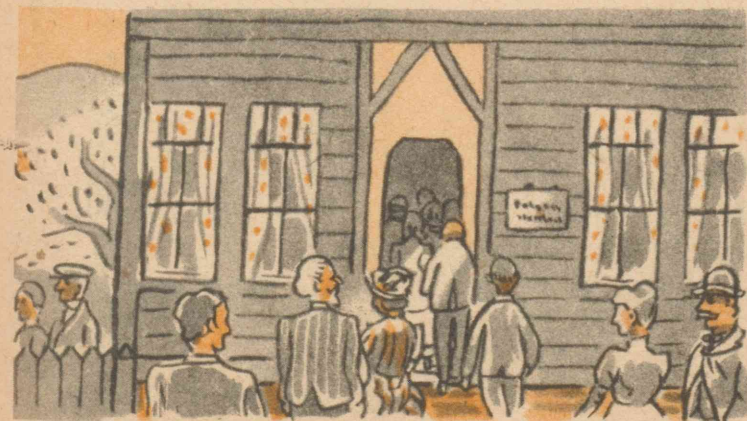
みんなが心配していました。

「ありがとう。ですけれど、病人からはなれてぶらぶら休んでいると、さびしくって、それこそ病気になってしまいますよ。」かの女の評判は日に日にひろがりました。病院つきでありな

がら、どうしてもたのまれることがあるので、病院の中だけに止まることはできなくなりました。

よばれるとかの女は、どんなに遠方でも、きたない所でも、かならず出かけて行きました。そして、ていねいにみてやりました。そのやさしいことば、あたたかいとりあつかいによって、多くのかん者が元気づき、明かるい希望を持ちました。

千八百七十八年、こう山区いきのある所に、新しい病院が建ち、その名は「ドロ



シー病院」とつけられました。

十一月にいよいよ完成し、さかんな開院の祝賀式があげられました。ところがかんじんのドロシーは、ついにすがたを見せませんでした。ふたたびおそいかかった病氣のために、とこをはなれることができなかつたのです。

そうして十二月、多くの親しい人々に取りかこまれて、ねむるように天国に帰ったのです。短かい四十七年の生がいでした。かの女が実際の仕事にたずさわったのは、三十四才の時からで、わずか十三年のかん護婦生活でした。しかしその間、まったく自分をわすれ、かん者のために生きとおしました。いつもかれらのために働き、いつもかれらのうちに生きました。



その生がいを思って、たれもが、かぎりない尊さにうたれ、つきない悲しみにひたされました。

ワルサルの木立のしげみ、深い緑につつまれて、まっ白な大理石の像が見る目も清らかに立っています。

その像が、賃金の安い労働者たちの、一ペンス、二ペンスのきふのけっしょうだと聞いては、さらに清らかさが増してきます。

これこそは、形においても、精神においても、かの女の清らかな一生を記念するのに、最もふさわしいものではありませんか。



学習の手引

一、出発

(一) かがやく太陽

(1) 詩は何度もくりかえして読むほど、深く味わえるものです。この詩をくりかえし読んでみましょう。読みながら自分の感じたことをノートに書きだしてください。

(2) この詩に書かれた世界について、みんな話し合ってください。

(二) どの花も

(1) この詩を読んで、めいめいで考えたことを話し合ってください。

(2) この詩の中で、いちばん心にのこるところ

ろはどこですか。それをノートに書きぬいてください。

(三) 五年生のはじめに

(1) 五年生のはじめにやった文集展らん会です。どのような展らん会だったと思いますか。

(2) 三人の文集のはしがきがしうかいされています。それをよく読んで、次ぎの問に答えなさい。

○ 田口君のはしがきには、どんな意気込みがあらわれていますか。

○ つしまさんのはしがきは、どういう意味を持っていますか。

○ 秋山さんのはしがきからは、どんなことがわかりますか。

(3) みなさんもこのような文集を作って、展

らん会をしてください。

二、働く人々

(一) 炭こう見学

- (1) 炭こう見学の文をよく読めるように練習しましょう。そうして、この炭こうは、どこにあるか、地図でしらべてみましょう。
- (2) 太いはり金で車を動かしていますが、この車は、なにに使っていますか。
- (3) 文を読んで、次ぎの問題に答えなさい。

○「ここは三回ばかりくずれた所です。」と聞いて、どう思いましたか。

○ 石炭は、こう内のどんな所で、ほって置きましたか。

○ ほった石炭は、どうして外へ運び出していますか。

○ カンテラは、なぜ消えたのですか。

のどんなところですか。

(4) 「とりやま」といふのは、どんなところですか。漁しは、なぜ「とりやま」をみつけると喜ぶのですか。

(5) 「かんばんは火事場のよう」の文を読んで感想を書きましょう。

(6) 次ぎのことばの意味を書きなさい。

○ だん流 ○ 最後 ○ 初夏 ○ 燃料

○ 航海 ○ 速度 ○ 交代 ○ 大漁旗

三、文学のあじわい

(一) Mちゃんのうた

(1) よく読みましょう。Mちゃんの作った四つのうたをおぼえ、そのうたをよくあたまにおいて、文ゼンたいをよく読みましょう。

(2) 次ぎのことを考えてみましょう。

おじさんは、四つのうたゼンたいを、ど

(4) 次ぎのことばのわけを書きなさい。

○ この島は、まったくの炭こう島であるわけである。

○ このへんからすぐ横に石炭そうが見えはじめ。

(二) かつお船

(1) 春は南、夏から秋は北というふうには、時季によって、かつおの漁場がかわるのは、どういうわけですか。

(2) かつお漁のさかんな場所をしらべて、それを地図にかきこんでみましょう。

(3) 「おきへおきへ」を読んで次ぎの問題に答えなさい。

○ かつおのえさにする小さいわしは、どうして、漁場までもっていきますか。

○ かつおのよくとれる所は、海水の温度

のようにひひょうしているか。

○ 四つのうたを、それぞれ、どのようにひひょうしているか。

○ おじさんは、どういういみの返事を書いたか。

○ この文を三つに分けて、おじさんの言おうとしていることを考える。

(3) うたをたくさん読みましょう。そして、次ぎのことを考えましょう。

○ 昔と今、時代によって、ふうがちがう。

○ 男と女、人からによってちがう。

(4) うたを作りましょう。作ったうたを集めましょう。

(二) 祭のふえ

(1) ふつうの文よりも、リズムがつよく出ていますね。さん文詩といえます。

(2) よく読んでいると、しだいに次ぎのことがわかるでしょう。よく考えてみましょう。

祭のふえ——なるふえ

自然の祭のふえ——うた(詩)

(3) 名高い詩人、北原白秋先生の、「祭のふえ」という、どうよの本のはしがきです。その本や、ほかの詩をたくさん読みましょう。

(4) 詩を作りましょう。詩集を編集しましょう。詩集にはしがきを書きましょう。

四、すずめのとけい

(1) 「すずめのとけい」の文をよく読めるように練習しましょう。

(2) この文の話は、前と後の二つにわかれています。それぞれの話をみじかくまとめてみましょう。

(3) 文を読んで、次ぎの問題に答えなさい。

しょう。

○ 草花の名を、花の色別に集めましょう。

○ その一つ一つについて、はえている場所、名まえの意味、花の色・形・大きさ・くさ・葉などの持ちようを書きだしましょう。

(3) このほかに、あなたの知っている夏の草花があったら、その名を集めましょう。

(4) 友だちといっしょに、夏の草花の観察に出かけましょう。知らない草花は、「植物図かん」で調べましょう。実物を取ってきて、「おし花」にしましょう。観察の記録をまとめて発表しましょう。

(二) 海の星の名

(1) この文を、大きく二つに分けて、よく読んでみましょう。

(2) 前の文では、次ぎのことを調べましょう。

○ ベルセリユウスについて、みなさんはどう思いますか。

○ 「すずめを助けてやってください。」といった生徒をどう思いますか。

○ この文に「すずめのとけい」という題をつけたのはどういうわけですか。

(4) 次ぎのことは使って文をつくりなさい。

○ おのずと

○ これこそ

五、楽しい観察

(一) 夏の野道

(1) これは、夏の野山にさきみだれる、美しい草花を観察した文ですね。物語・詩などどくらべて、その書きぶりは、どんな点がちがうかを考えてみましょう。

(2) 次ぎのことを調べて、ノートにまとめて

○ 「ネノホシ」とは何か。その名のわけ。

○ 「シソウノホシ」とは何か。その名のわけ。

○ 桑名屋徳蔵は、これらの星を、どういうふうに使ったのですか。

(3) 後の文は、徳蔵の妻の話ですね。

徳蔵の妻は、なにを発見しましたか。その発見について、どう思いましたか。

(4) 友だちと、夏の星を調べましょう。

星のことを書いた、本を読みましょう。調べたことを、文や図にまとめましょう。それを発表しましょう。

六、観光日本

(一) 国立公園

(1) 国立公園の文がよく読めるように練習しましょう。

(2) おとうさんのお話をくわしく調べて、次

ぎの問題に答えなさい。

- 国立公園をきめるのはだれですか。
- 国立公園になるための条件には、どんなものがありますか。
- 白地図をつかって、国立公園の位置を書きいれてみましょう。

○ 世界の名高い国立公園をしらべて、どんなとくちようがあるかを研究しましょう。

- (3) 国立公園の絵葉書やポスターを集めて、展らん会を開きましょう。

(4) 次のことばに読みがなをつけなさい。

○ 観光日本 ○ 条件 ○ 風景 ○ 変化

○ 便利 ○ 設備 ○ 位置 ○ 写真

- (5) みなさんも旅行したことや見学したことを文に作ってみましょう。

(二) 十和田湖行き

○ この物語に聞きとれていた。

七、人類愛

(一) ジェンナー

- (1) これは、「種とう」を発明した、有名なエドワード・ジェンナー先生の伝記ですね。

こういう長い文は、どうしたらよく調べられるか。まず、それを考えましょう。

- (2) 話のすじをたどって、大まかに、いくつかに分けて、読みかえしましょう。

(3) よく読んだら、次ぎのことを調べて、要点をノートに書きましょう。

- ジェンナーは、いつ、どこで生まれましたか。それは、今から何年ほど前ですか。
- 二十二オのころは、どんな研究がすきてしたか。
- 「牛とう」と「天然とう」の研究の要点

- (1) 十和田湖に旅行したつもりで、この文をよく読んでみましょう。

(2) 青森からバスに乗って、十和田湖につくまでの間で、どんなところが美しかったかそれをいってごらんください。

(3) 八ろう太ろうの伝説をよんで、どんなところがおもしろいかいってごらんください。

- (4) 次の問題に答えなさい。

○ おいらせ川の美しいわけをしらべてごらんください。

○ 十和田湖ではどんな魚を養いよくしていますか。

○ この作者の旅行したきせつは、いつごろですか。

- (5) 次の文をわかりよくかいたくしなさい。

○ こけの美しさはまた格別である。

を書きだしましょう。

○ 四十オのころの研究では、どこに苦心がありましたか。

○ ジェンナーの研究を、世の中の人は、どう見ましたか。

○ ジェンナーのえらい点は、どこですか。

○ ジェンナーの研究ぶりを、あなたはどう思いましたか。

- (4) ジェンナー先生の伝記を、ほかの本でくわしく読みましょう。その要点をノートに書きましょう。そして、それをじょうずに発表しましょう。

(5) 世界のすぐれた人々の伝記を、たくさん読んで、いろいろ考えましょう。そして友だちどうして話しあいましょう。

(二) ドラねえさん

- (1) 全文を読みとおしてください。その感そ
うを、ノートに書いてごらん下さい。
- (2) ドロシー・バッチソンを、なぜかん者た
ちが「ねえさん」とよんだのですか。
- (3) ドロシーは、おさないころどんな遊びを
していましたか。
- (4) 「ドロシーや、いっそのこと、おまえは
かん護婦さんになるかね。」
これはおかあさんのことばですが、なぜ
おかあさんはこんなことをいったのですか。
- (5) ドロシーが就職したワルカル炭こうの病
院は、どんなかん者のくる所ですか。
- (6) ここでドロシーはどんな決心をしました
か。
- (7) 夜ふけに運ばれてきた若者のうでを切ら

ないで助けようと考えたドロシーは、どん
なに働きましたか。

- (8) それから三週間の後に見にきた医者
はなぜ声をあげてないたのでしょうか。
- (9) ドロシーが病氣にかかった時、若者はど
うしましたか。またその時若者のいっただ
とばをよく味わってみましょう。
- (10) ドロシーがなくなったのはいつですか。
- (11) ドロシーの像はどのようにして立ちまし
たか。
- (12) このように人々のためにつくした人の話
をたくさん集めてみましょう。
- (13) 次のことばの意味を書きなさい。
○感覚。 ○みじゆく。 ○修行。
○切斷。 ○不具者。 ○視線。 ○全快

新しく出たおもなことば

愛情	132	入り海	27	およばない	52
アザミ	65	いわな	97	快活	125
あどけない	44	うずうずし(て)	30	かいほう人	120
アフリカたんけん	103	ウツボグサ	69	海面	30
あやまつ(て)	115	うめき声	130	海鳥	30
イカリボシ	74	うやま(われ)	104	海ばつ	91
息づかい	49	うるたえ(ません)	118	書きそえ(て)	37
息せききって	60	えぞ	75	格別	93
いけす	24	江戸時代	71	カシオベヤ	74
医師	127	えりもみさき	24	活用	10
いず七島	24	円すい形	91	かつお漁	23
位置	86	おつつ(かない)	25	かつ車	16
イチヤクソウ	70	おのずと	54	かなえ(られる)	126
いでたち	16	おはやし	45	花粉	4

こうばい 18
 国立公園 80
 こころみ 111
 コレラ 106
 コンバス 28
 根気よく 34
 さいばい 10
 境目 29
 さかのぼり 99
 ささえ(て) 17
 ささげ(よう) 128
 寒々と(した) 42
 しおのみさき 23
 ジーゼル・エンジン 25
 司会 10
 指極星 73

祝賀式 143
 四国おき 23
 ジシバリ 63
 種々様々 14
 視線 130
 自然 51
 シノウノホシ 73
 従え(て) 41
 下火 33
 自重 10
 出港 26
 失望 130
 しぶき 32
 修行 99
 受話器 28
 種とう 115

十二し 72
 就職 126
 重油 26
 じゅんな 40
 賞金 119
 条件 82
 職場 141
 生がい 144
 処置 137
 小きぼな 15
 食りよう 26
 初夏 24
 人工的に 115
 信らい 135
 人類愛 103
 スウェーデン 54

川せ 46
 かん高い 35
 かんぱん 34
 かんこ鳥 92
 カンテラ 16
 かん単 82
 かん者 120
 感覚 125
 感げき 59
 間かく 19
 閑せつ 137
 観光日本 80
 岸へき 35
 機関 95
 ぎせい 56
 きそつて 60

きつ水 26
 きびきびと 10
 希望 135
 きも 21
 疑問 129
 逆に 112
 牛とう 105
 漁場 24
 共通な 112
 強固な 125
 金か山おき 24
 禁じ(ました) 139
 くうにゃん 38
 クサノオウ 65
 苦つう 130
 クラス 9

クレーン 5
 黒しお 23
 加え(られる) 104
 経過 136
 ゲートル 16
 外科 103
 けしつぶ 51
 結局 113
 血えき 132
 健康そのもの 137
 原始的 20
 講義 54
 こうしまど 76
 こう山区いき 142
 こう道 127
 コウゾリナ 64

天然とう 106
 天然の 92
 伝説 98
 東けい 28
 同情 128
 とっさに 41
 鳥山 30
 情深い 57
 なっとく 109
 なやみ 120
 南部馬 90
 ニガナ 62
 人気者 10
 念入りに 117
 燃料 109
 農園 26

農夫 107
 ノゲシ 65
 はい気しょう 55
 ハクセキレイ 105
 はしがき 8
 初がつお 24
 はつかとう 45
 はっぱ 21
 花園 7
 パリー大学 54
 はれやかな 13
 反省 10
 半島 101
 悲あい 130
 ひいらぎ 11
 ビストン 4

ひたひたと 94
 美点 10
 ひなたくさい 45
 ひふ 129
 ひめます 102
 ひょうきん 10
 ひらめき(ました) 132
 ヒレアザミ 68
 不安 18
 風景 83
 不快 137
 不具者 127
 復興 43
 物理学者 54
 ブリッジ 29
 文化 54

すがすがしい 13
 すなおに 39
 精いっぱい 6
 精神 125
 成長 124
 製本 8
 石炭そう 19
 せく 114
 絶対に 135
 切断され(ました) 127
 設備 85
 全快 137
 戦さい 42
 船倉 33
 想像 47
 像 119

速度 28
 注がれ(て) 130
 大群 29
 大漁 34
 大理石 144
 太平洋岸 23
 だ円形 69
 絶えず 28
 たぐみな 39
 たしかめ(ました) 110
 たずさわっ(た) 143
 たたえる 119
 たたっ(て) 139
 尊さ 144
 たわめ(ながら) 32
 たんか 130

炭こう 15
 だん流 23
 地球 5
 地下たび 16
 知人 15
 中ふく 17
 治りよう法 129
 賃金 144
 通信士 28
 使い果す 33
 つぶやき(ました) 76
 つりがね形 55
 つるはし 19
 定期船 15
 弟子 103
 手間 25

昨きのう次つぎ境さかい準じゆん漁りし位ゐ様さま散ち示し陽やう
 (35) (32) (29) (26) (23) (17) (14) (11) (8) (4)

無ぶ予よ交かう油あぶら勢せい連れん州しゅう静しず君くん粉こな
 (36) (33) (29) (26) (23) (18) (15) (12) (8) (4)

現あら倉くら群ぐん燃ねん最さい側かた定てい積つ善ぜん子こ供ども
 (39) (33) (29) (26) (24) (19) (15) (13) (9) (4)

従したが果はた投な測はか季き曲まが約やく消しょう反はん精せい
 (41) (33) (31) (28) (24) (19) (15) (13) (10) (6)

戦せん防ぼう競きやう絶た初はつ順じゆん務む階かた省せい飛と
 (42) (35) (31) (28) (24) (20) (16) (14) (10) (6)

復ふく旗き争そう速そく備そな過か路ろ種しゆ司し展てん
 (43) (35) (31) (28) (25) (21) (16) (14) (10) (8)

新しく出た漢字

文集展らん会
 平和
 ベスト
 ヘルト
 変化
 ほおえみ(ながら)
 防波てい
 方向
 方角
 ぼうそうおき
 北い
 北極星
 ぼくし
 北と七星
 母港
 ホタルブクロ

68 34 73 103 72 28 24 72 28 35 59 84 5 106 54 8

ぼたんばけ
 ホテル
 ほととぎす
 ほまれ
 まじりけ
 またたき
 まみれ(て)
 みじゆく
 身もだえ
 むくいる
 むしや絵
 無線電信
 むなさわぎ
 群
 目がしら
 面会謝絶

139 138 29 45 25 70 61 130 125 26 49 6 104 24 102 68

文字通り
 ユキノシタ
 養しょく
 養成所
 容態
 ヨシキリ
 予備
 予防法
 ライター
 例
 レシーバー
 ロンドン
 論文
 わき水
 わめき(ながら)

127 94 117 119 28 112 22 111 33 105 141 126 102 71 128

賃 <small>ちん</small>	処 <small>しょ</small>	満 <small>まん</small>	論 <small>ろん</small>	数 <small>かず</small>	悲 <small>かな</small>	客 <small>きやく</small>	条 <small>じょう</small>	厚 <small>あつ</small>	門 <small>もん</small>	寄 <small>よ</small>	興 <small>こう</small>
(144)	(137)	(127)	(117)	(106)	(98)	(88)	(82)	(71)	(60)	(52)	(43)
起 <small>おき</small>	断 <small>だん</small>	万 <small>まん</small>	選 <small>えら</small>	修 <small>しゅう</small>	燃 <small>も</small>	件 <small>けん</small>	極 <small>きく</small>	舍 <small>しゃ</small>	有 <small>ゆう</small>	際 <small>さい</small>	
(139)	(127)	(118)	(111)	(99)	(90)	(82)	(72)	(60)	(54)	(43)	
謝 <small>しゃ</small>	疑 <small>ぎ</small>	護 <small>ご</small>	逆 <small>ぎゃく</small>	経 <small>きやう</small>	止 <small>と</small>	景 <small>けい</small>	飲 <small>の</small>	折 <small>お</small>	講 <small>こう</small>	育 <small>そだ</small>	
(139)	(129)	(120)	(112)	(100)	(91)	(83)	(75)	(63)	(54)	(47)	
禁 <small>きん</small>	失 <small>しつ</small>	婦 <small>ふ</small>	例 <small>れい</small>	類 <small>るい</small>	格 <small>かく</small>	化 <small>か</small>	妻 <small>つま</small>	毒 <small>どく</small>	義 <small>ぎ</small>	想 <small>そう</small>	
(139)	(130)	(120)	(112)	(103)	(93)	(84)	(75)	(63)	(54)	(47)	
容 <small>よう</small>	視 <small>し</small>	望 <small>ぼう</small>	関 <small>かん</small>	才 <small>さい</small>	増 <small>ま</small>	便 <small>べん</small>	結 <small>けつ</small>	似 <small>に</small>	徒 <small>た</small>	像 <small>ざう</small>	
(141)	(130)	(126)	(114)	(103)	(99)	(85)	(79)	(64)	(56)	(47)	
区 <small>く</small>	殺 <small>ころ</small>	就 <small>しゅう</small>	係 <small>けい</small>	隊 <small>たい</small>	移 <small>うつ</small>	設 <small>せつ</small>	送 <small>おく</small>	覚 <small>おぼ</small>	反 <small>はん</small>	息 <small>いき</small>	
(141)	(134)	(126)	(114)	(104)	(95)	(85)	(81)	(67)	(58)	(49)	
賀 <small>が</small>	希 <small>き</small>	職 <small>しやく</small>	応 <small>おう</small>	加 <small>か</small>	飯 <small>はん</small>	浅 <small>あさ</small>	单 <small>たん</small>	舌 <small>した</small>	对 <small>たい</small>	然 <small>ぜん</small>	
(143)	(135)	(126)	(114)	(104)	(97)	(87)	(82)	(69)	(58)	(51)	

文を書いた人

- 一 (一) かがやく太陽……………北原白秋
 - 三 (一) Mちゃんのうち……………谷原白秋
 - 三 (二) 祭のふえ……………北原白秋
 - 四 すずめのとけい……………高橋邦太郎
 - 五 (一) 夏の野道……………本田正次
 - 五 (二) 海の星の名……………野尻抱影
 - 六 (一) 十和田湖行き……………石森延男
 - 六 (二) ジェンナー……………長野泰一
 - 七 (一) ドラねえさん……………上沢謙二
- このほかの文は編集部とじどうのもの

絵をかいた人
高橋庸男 西村保史郎

国語の本 九 (小学校第五学年前期用)

Approved by Ministry of Education
(Date Mar. 21, 1950)

昭和二十五年三月二十一日印刷
昭和二十五年三月二十五日発行
(昭和二十年 月 日 文部省検定済)

著作者	西原慶一 泉 節二
山下正雄 飛田多喜雄	
小山玄夫 斎田 喬	
発行者	東京都北区稻付町一丁目二〇八番地 二葉株式会社
代表者	大野 治 輔
印刷者	東京都北区稻付町一丁目二〇八番地 二葉株式会社
代表者	大野 治 輔
発行所	東京都北区稻付町一丁目二〇八番地 二葉株式会社



なま元

広島大学図書

0130449933



二葉株式会社